まゆ

げんじあきら

目次

〇地球のチャンピオン

〇私を見抜けるのは

〇お母さん
愛は人が動く押しボタン

〇愛は人が動く押しボタン

〇絆は本当にある

〇大人の社会でも愛は人が動く押しボタン

〇愛しているもの

〇人が動く押しボタンは２つある

〇よろいのボタンと愛のボタン

〇３つ目の人が動く押しボタン

〇３つ目の人が動く押しボタンのプラス１

〇一見愛のボタンは複雑

〇愛のボタンの大きさや機能はみんな同じ

〇愛のボタンはよろいによって隠される

〇愛のボタンは育つものではない

〇あかちゃんにだけ全開の愛がある

〇３つのボタンの優先度

〇こころは愛の器と考えるとわかりやすい

〇こころが広い人と狭い人がいる

〇育てのコンセプト

〇子どもたちは人が動くボタンでしか動かない
自分で育つ

〇自分で育つ

〇胎盤さえも自分でつくる

〇６倍もの地球のチカラ

〇おっぱいを飲むことだけはできる

〇しばらくはおっぱいを飲むことしかできない

〇おっぱいとは何か

〇おっぱいの本当の役割

〇おっぱいを飲む口がやっかい

〇食べる話す呼吸するが口の役割になる

〇唇が食べ物を判断する

〇何でも食べられるわけではない

〇呼吸のこと

〇口を閉じる習慣

〇匂うことで危険を察知している

〇音を聞くことでも危険を察知する

〇危険を知らせるために泣く

〇夜泣き

〇湿度が30％台になるとカゼでお休みが多い

〇熱が出る

〇体温が低いとまずい

〇手が動きはじめる

〇ハイハイ

〇歯が生えてくる

〇たっちする

〇歩きはじめるために

〇２本の足で歩くための工夫

〇歩きはじめる

〇手が自在になる

〇手はモノとの係わりのためにある

〇遊び

〇遊ぶおもしろさ

〇やはり自分で育つ
学習ということ

〇まゆは私を観察している

〇学習のお手本

〇学習のモノ

〇学習のコンセプト

〇大人はすぐに目的を探す

〇学習のコンセプトは学習から得られる

〇勉強とは何だろう

〇あかちゃんに教えることは何もない

〇教えるという不思議さ

〇教育って何だ

〇自分で育って自分で学習する
あかちゃんのように

〇あかちゃんのように

〇まゆに話すチャンスがあれば

まゆのこと

いつもの時間ピッタリに、まゆのお母さんはお迎えにやってきた。
車のドアをバタンと大きな音で閉めて、後を回って来る。
こちらに歩いて来る歩幅も同じだ。
長い髪を歩きながら束ねて、ゴムで止める仕草もいつもと変わらない。
まゆがここに来た産休明け３ヶ月から、毎日見ている光景である。
長い髪を束ねる仕草一つ一つに、まゆへの深い愛を感じる。
どうして産休明けから、まゆを保育園に任せなければならなかったのか、深くは聞いていない。担当の保育士にも聞いてはいない。
おつかれさま～。まゆのお母さんは、いつもこう言って保育園の重い引き戸を開けていた。
まゆちゃん～お母さんよ～……..次の言葉もいつもどおりだった。
もう誰も入り込めない。まゆとお母さんの短い世界が広がる。担当保育士も、しばらくは近寄らない。
短い時間を、保育士はよくわかっている。今日１日のまゆの出来事を、こと細かく聞きたいのだろう。まゆと床に座って、遊びながら、立ったまま話す保育士の話しを聞いていた。私も時々は話しをした。すべてがまゆの話しで、何人目の子どもであるのか、ご主人はどうしてお迎えに来ないのか、などといった話しをすることはなかった。
私がまゆを抱かない日は、１度もなかったように思う。
最初は、私に慣れずにぐずついてばかりいた。
私は私で、新米の園長であったが、少しはあかちゃんに慣れてきた頃だった。
まゆ時間は不規則で、まゆが起きて、遊ぶ時間に間に合うことは少なかった。
私の時間も不規則で、保育園の園長としての役割を果たしている、などと思ったことは一度もなかった。私は一日中トレーナーにエプロン姿で通したが、研究開発の役割と兼務で、保育園に入る時間は少なかった。
いつの間にかスタッフたちは、私が保育園に入ると、何よりも先にまゆの顔を見に行くことが、あたりまえだと思うようになった。

私を見抜ける

○私を見抜ける

　まゆがまだ寝てばかりいる頃、ある日思わぬことに気づいた。

研究所でちょっとしたミスが発生した。開発上のトラブルだった。ミスそのものはたいしたことではないが、責められるハメになってしまった。よせばいいのに、いつものとおりガンバッて、言い訳をして、できもしない約束をしてしまった。私の語気も荒くなっていた。

そのまま居ずらくなって保育園に逃げ、そして保育園の裏通路から入っていった。

ところが、保育園のみんなは、私の顔に不吉なものを感じ取っているかのような顔をして、誰も寄ってこない。声をかけても生返事で、そのまま通り過ぎていく。これはおかしい。

結局保育園にも居ずらくなって、外にある休憩所でタバコを吸いはじめた。

これは何だろう。

このようなことは度々だった。

次第に、読まれているのではないかと感じるようになった。

思えば、最初から感じ取るべきだった。みんなとの初対面の時の、私への不安げな表情も気になった。みんなと最初に会ったのは、お母さんとお父さんと一緒に、保育園に見学に来た時である。まだ籠に入れられて、お父さんに、持ち物のように連れて来られたあかちゃんもいた。お父さんに抱っこされるあかちゃんには、不安が広がっていた。

私に案内されて、保育園を見て回る時も、お母さんとお父さんの３人で話す時も、私をじっと見ていた。

私は読まれていた。

思わぬことに気がついて以来、真剣に考えるようになった。

意識して心を入れ替えて、保育園の裏口を開けてみると、一瞬、私をじっと見て、私に、遊ぼう？と近づいてくる。心を入れ替える余裕もなく裏口から入ると、一瞬、私を見て、走り去って行く。

だんだんいろいろなことがわかってきた。
もうはっきりしてきた。
みんなは私を見抜ける。
このことが、自分の中で確信となった時、私は変わらざるを得なくなった。

〇私は変わらざるを得ない

　自分でもわかるくらいに、私は変わっていった。
大人に合わせるのか、保育園のみんなに合わせるのか。保育園のみんなに合わせるしかない。保育園のみんなとコミュニケーションがとれないことが、今の自分には最も辛いことだと思った。
少々時間を要した。そんなに簡単に変われるものではない。
研究や商品開発の仕事をながくやってきて、ミスの言い訳に長けてきている。仲間のヒット商品に嫉妬した。逆に嫉妬されて足を引っ張られることに悩んだ。このようなことを並べ上げればキリがない。自分が優れてることを示したい。
もともと、私はこのような邪心が少ない方だった。それにもかかわらず、私は変わらざるを得ない。
大人と一緒に仕事をする時は大人のように、保育園のみんなと一緒にいる時は子どものように。しばらくは、保育園に入る時だけ、目をつぶって落ち着いて、裏口のドアを開けていた。
しかし、これにも限度がある。
私自身の限度である。
そんなにうまく、たちふるまえるわけがない。あまりにもギャップが大きい。私自身がおかしくなってしまう。
決心して、１本化することにした。保育園のみんなに合わせるのだ。
ダメなものはダメ。ミスはミスで謝る。キライなことはキライ。やりたいことは反対があってもやる。もともと、やりたいことがあれば反対があっても貫いてきたのに。
保育園のみんなとは、順調にコミュニケーションがとれるようになってきた。

しかし、大人の仕事では新たなトラブルの基になってしまった。
衝突することが多くなった。
なんとか、ごまかす方法を一緒に考えていたのに、私が急に裏切るような発言をしはじめた。ダメなものはダメだよ。私の口グセになった。反発も強く、もう大人と一緒に仕事をすることができないのではないかと思わせた。
しかし、私に迷いはなかった。
自分が変わってみて、大人がよく見えるようになってきた。
保育園には、いつも多くの見学者があった。スーツ姿で保育園に入ってきて、立派な保育園です、などとお世辞を並べて、自分勝手に保育園を歩き回り、報告書のための質問をし、子どもたちには話しもしない。
子ども達は黒っぽいスーツがキライだ。みんなは、しばらくは固くなって、嵐が過ぎ去るのをじっと待つしかない。
どうしてこうなんだろう。
しばらく前の、自分を見ているかのようでもあって、なんとも寂しくなってしまい、私の説明もそこそこになっていった。もう以前のように、施設の少々の自慢げな説明をすることもなくなった。

〇大人の２面性

　大人はどうして自分の中に２面あるのだろう。
スキでもないのに、上司にはスキではないとは言わない。おいしくもないのに、料理が上手ですと言ったりする。行きたくもない飲み会に出かけたりする。
大人では、このようにうまくたち回ることが求められる。上手なたちふるまいができることを、大人になったと表現する。
ダメなものはダメと、自分の考えを通そうとすると、トラブルになる。ダメにすることによって、他者に責任が及ぶことも多い。結局、曖昧な当たりさわりのない結論を探すことになる。多数決になると、だいたい誰にも嫌悪感を与えない結末を選択する。
自分が変わってみて、自分の今までの生きざまが、よく見えるようになってきた。同時に、大人の判断が不思議に思えるようになる。

アフリカの豹にはこのようなことがあるとは思えない。
豹は、個が、自分のチカラだけで生きているように思える。親子であってもダメなことはダメで通しそうである。猿には、豹とは異なる判断がはたらいている。ボスの命令には背かない。たとえ自分の考えと違っていても、命令には従う。ボスには、毛つくろいもする。
ヒトも同じであろう。
集団で暮すことで生き残ってきたヒトには、もう、自分の中に２面を持たなければ、生きてはいけないのだろう。ヒトが、豹のように暮すことは許されない。集団が、たとえ生き物として誤った行動をとったとしても、集団に逆らうことは難しい。
ヒトが大人になるということは、悲しいけれど、自分の中の２面性を認めることである。
１面は、自分が感じるままの自分であり、その感じるまま行動する自分である。２面は、周囲を察して、周囲の感じていることに、自分を合わせて行動する自分である。あるいは、自分が感じるままを、自分の有利なようにねじ曲げて行動する自分である。
あかちゃんには２つ目の面は存在していない。すべて自分が感じるまま行動する。
２つ目の面は、学習によって養われるものである。

○子どもには本音しかない

大人が１面だけ、つまり本音１本で生きることは、極めて難しい。私が自分を変えてみて、つくづく思う。あなたが言っていることは理解はできるけれど、それでは責任を認めることになる。何度も言われる。責任を認めればいいのに、曖昧な結果を模索しようとする。結局、私が多くの責任を負うことになる。
大人の交渉とは、すべて、２面でなされる。自分や自分が属している集団が、有利になるように、たとえウソっぽいことであっても、誇張して話す。
１面で、自分はこうしたいんだけど、と話すことは少ない。相手の本心を読むことに長けなければ、交渉が上手にはならない。

次第に、大人が見えるようになってくる。この人は、やりましょうと言ってくれているけれど、動いてくれないだろう。この場の雰囲気を良くしてくれているだけだ。
私が、子どもたちが人を読める状態に、近くなっていることに気がつく。
子どもたちと生活してみて、子どもには本音しかないことがよくわかる。注射をする時にイヤがらない子どもはいない。イヤなのに、何でもない顔をする大人のような仕草は、しない。
自分が、本音１本で暮すようになると、子どもたちと一緒にいることが、心地よくなってくる。何がイヤなのか、どうしたいのか、わかりやすくなる。
どうしたの？何がしたいの？何がイヤなの？と聞くことが少なくなった。聞かなくても理解できるようになる。
一般的に、あかちゃんが、何をイヤがっているのか理解できないことが多い。あかちゃんは宇宙人だと思えと言う人もいる。しかし、あかちゃんほどわかりやすいジャンルの人はいない。２つ目の面がないのだから。大人的２面性であかちゃんを見ると、そのすべての行動が理解できない。
仲間に、遊んでいるおもちゃを取り上げられて、取り返してくれと言ってくる。仲間が遊んでいるおもちゃが欲しくて、横取りする。大人の感覚では、良くないことのように思える。しかし、良くなくなるのは、そのおもちゃが欲しいあまり、おもちゃをワルく言って、手放させる、などといったことを考えてしまうことである。
いつからか、あかちゃんでさえ、本音１本では暮さなくなる。

〇表裏がない

　大人で、表裏のない人はいない。すごいクリエイティブですね〜と言われても、安心はできない。後々、やってることが理想主義でどうにもならない、と言っていることを伝え聞いたりする。大人は、自分の有利になるように、表と裏を使い分ける。表裏を使い分けることを、良くないことだと認識していないように思える。無意識に近い。
保育園でも、何度も経験する。立派な保育園ですね〜。あれでペイするんだろうか、後で聞こえてくる。ペイするんですか？と聞けばいいのに。

子どもさんたち〜自由でいいです〜と言われて喜んではいけない。あいさつもできないなんて〜どうなってるの？……..あなたを歓迎してないだけだけど。
褒められても、言葉が終わらないうちにでも、本当はどう感じているのかを読まなければならなくなる。あとでどう評価するだろうか、などと考えながら話しをすることになる。常に表裏を判断しなければならない。
自分が変わった後でさえ、賢こそうなお子さんばかりですね〜と言われると、うれしくなって、自分の中の表裏をくすぐられる。
本音１本で生きることは、あかちゃんと同じように暮すことで、表裏が全くないことを指す。
あかちゃんなのに、彼等は私を見抜ける。見抜けるのは、自分の味方であるかどうかを判断するチカラが、長けているかのように思える。自分の味方である瞬間を、判断できるとしか考えることができない。もともと、人間には裏などないと考えなければならないのだろう。
生き残れるかどうかが、あかちゃんの主要な関心事であって、人間同士の些細なかけひきのようなことは、小さな問題にすぎない。
ずっと大昔に、あかちゃんだからこそ、生き残ることに大きなリスクがあっただろう。他の生き物から哺食されやすい。だから、今生き残ることにすべてを注いでいる。このずっと大昔の習性は、いくら、あかちゃんにとって安全な環境になった現代だからといって、変わるものではない。
多分、これからもずっとあかちゃんは変わらないだろう。
人が持つ表裏などということは、人が生き残ることに関係はない。人同士の競争が生じさせたものである。

〇固定観念

　子どもたちに合わせるために自分を変えるのだが、大人とうまくいかなくなるのは仕方ないとしても、自分の中で葛藤しなければならない。よくよく考えてみると、私は固定観念の塊のようだった。あかちゃんとは何なのか、漠然とはしているものの、ある種のイメージがある。お母さんとは何なのか、これも私の中には定まったものがあった。

あかちゃんは未発達な大人であるという概念である。
あかちゃんは未発達な大人ではなくて、単にあかちゃんというジャンルの人にすぎない。
それは、高齢者だとか、高校生だとかのジャンルと何も変わらない。未発達でもなんでもない。高齢者の場合は、高齢者の身になって考えようとするが、あかちゃんの場合は、あかちゃんの身になって考えてみようとは言わない。
何かがおかしい。
どこでどうして、このような固定的な考えが自分の中に出来上がったのだろう。
あかちゃんはどうにもなんないよ～と考えてしまう。
しかし、どう考えても、未発達ではない。表裏がないことでは、大人を圧している。
ことばが話せないことや、生まれた時からごはんが食べられるわけではないことや、１才くらいにならないと歩けないことの、見せかけの動きだけで判断してしまう。
これは固定観念である。もうずっと昔から大人が抱いてきた、あかちゃんに対する固定観念にすぎない。未発達だからを前提に、教えなければならないという概念が生まれている。何を教えるというのだろうか。大人の見にくさを教えるのだろうか。
あかちゃんは、私にとっては、人間としてのお手本である。人間としての原点でもある。
もう、いくら私があかちゃんのように、原点に返ろうとしても、難しい。

〇捨てる

　私が自分を変えたことは、具体的にどういうことなのか考えてみた。自分をどのように変えようとしたのか考えてみた。
それは単に捨てることだったように思う。
今まで築き上げてきた多少の功績や名誉のようなものも含めて、捨てなければ自分を変えられない。あかちゃんの近くでは、何事であっても何の役にも

立たない。あかちゃんが安心できるのは、完全なる自分の身の安全であり、人であれば、自分の味方かどうかにあって、私の今までの功績など何の意味もない。
子どもたちの味方になり得るかどうかは、あかちゃんのことを読めなければ話しにならない。何をしたいのか、何を欲しがっているのか、何を思っているのか、何を恐がっているのか。
自分の中に固定的に積み上がった概念では、とてもあかちゃんを読めない。それらを捨て去らなければ、積み上がったものに頼ってしまう。自分の中の概念をも捨てなければ変われない。捨てたところで、自分の環境は何も変化しない。変化しないのに自分が恐がっているだけだ。
捨てるんだ捨てるんだと、何度も自分に言い聞かせて暮してみた。
自分の今までの生活では、捨てるものは、読み終わったパンフレットのような、価値の少ないモノでしかなかった。少しでも価値があると考えたモノは、大事にしていた。
自分が大事にしてきたものは何だったのだろう。
自分の外から見えるもの、カッコいいもの、他者との競争上優位に見えるもの、それらのものを、ずっと積み上げてきたように思う。
そして、それは、私の生きるコンセプトに影響している。
これを捨てなければならない。

○よろい

　よくよく考えてみると、これはタイヘンなことである。今まで築いてきた概念をも捨てることだから。
私は、生身の身体の上からよろいを着ることに懸命だった。
私がではない。私は、むしろよろいの価値を小さく見積もってきた１人ではないだろうか。
現代では、生身の自分に、何かをプラスをしようと考えて動くことは少ない。生身の上に何かを張り付けようとしてガンバル。
有名大学卒業というよろいのために受験する。国家試験があれば受けてみたい。自分の特長をはっきりさせるためではあるが、それは結果的には、自分

のよろいを厚くするだけになることが多い。
名刺に書ける肩書を考えてしまう。マネージャーと早く書きたい。早く教授と書きたい。そのために必要なことがあれば、一生懸命にやる。有名一流企業に勤めたい。一生が保証されるようなものだからではあるが、それは生身の自分ではない。すべて同じである。
大人は、生身の自分とは異なる、自分のよろいを厚くすることが、社会的な地位を高めることだと考えている。報酬が高くなることだと考えている。そのことが固定観念になっている。無意識のように、よろいを厚くすることを追い求める。
他者は、生身の自分を見ているのではなくて、よろいに見える自分を見ていることを、大人全員が、よくわかっている。このことは、あまり深くは考えない。考えないというより考える機会がない。小さい時からずっと変わらず、よろいの価値観の中で育ってきた。社会風土のようになっている。だからよろいを厚くすることに努力を惜しまない。
私もそうだった。
あかちゃんには、よろいが１枚もない。
だから、あかちゃんは、よろいを着けた自分から外界を見ることはない。大人は、自分のよろいを通して外界を見る。そこに見えるのは、自分のよろいのバイアスがかけられる。偏らないものの見方をする人は皆無になる。人間として偏らないことはあり得なくなる。
しかしあかちゃんは違う。
あかちゃんは、生身の人間としての原点から外界を見る。人間としての原点、それは、生き残らなければならない過酷な生き物としての状況と、人間にしか宿すことができなかった愛である。
この人間としての原点から私を見れば、私が、自分が生き残ることに不利になるかどうか読まれるのは当然の事であろうし、愛あるヒトかどうか読まれるのも、仕方のないことだろう。
よろいは、何の役にも立たない。生き残ることについても、愛についても。
自己を否定されることが、最も悔しいことだが、その自己は、単なる自分のよろいであることが多い。ムダなことを守ろうともする。
よろいを捨てることは自分を否定することに近い。

よろいを捨てたと信じている私から見ると、なんとバカバカしいことが日常時事刻々と行われているのが、不思議にさえ思える。それが、あかちゃんには通用しないということではない。人間の原点から離れているからである。

○せんせい

私は保育園の園長だった。みんなは、私のことを園長先生と呼んだことがない。保育士にも先生と呼ばれたことがない。

ある時、私を、昨日まで……..さんと呼んでいたのに、朝やってきて、園長先生おはようございます、と言った３才の子どもがいた。私は驚いてしまった。

これは何だ？私のことを園長だとか、せんせいだとか言わせなかった。スタッフのみんなも、お互いに名前で呼ぶように言っていた。保育園にある、子どもには関係のないヒエラルキーを排さなくてはと考えていた。子どもと私は対等であって、私は園児に何かを教える人でもない。ただ一緒に、毎日何時間も暮す人である。子どもたちが私を必要とすれば、何かを言ってくる。私は私で、子どもたちを必要とするから、何かを話しかける。

園長先生おはようございますには、ものすごい違和感があった。

３才の子を問いつめることは止めて、私の名前を宣伝して回った。スタッフに、私の名前を呼ぶ機会を多くするように頼んだ。お母さんに、あんた、朝保育園に行ったら、園長先生にこう言うんだよ？と教わったに違いない。

３才近くになると、このようなことが頻繁に起こりはじめる。子どもがことばを理解するからで、一般的な習慣を教えられる。園長先生おはようございますに、どういう意味があるのだろう。多分、余計なことだ。

大人の世界では、園長先生おはようございます、のようなことが、日常である。ほとんどが、儀礼的に動くように、身体が訓練されている。その儀礼的に身体が動くことは、園長先生おはようございますと言わなければならないと、頭に刻み込んだものである。大人は、ほとんどの行動を、この頭に刻み込んだもので行う。これは何だろう。

よろいがつくられはじめている。

園長先生おはようございますは、よろいが発している。子どもは、最初は、

単なる固有名詞としてせんせいと言っているにすぎない。だから、お母さんに言われたに違いない、明日園長せんせいおはようございますって言うんだよ、を問題なく受け入れる。
しかし、このせんせいが次第に子どもと大人に境目をつけてしまう。それは次第にやって来る。いつしか、せんせいは立派で子どもは未発達であるという境目ができてしまう。子どもは子どもであって、大人の未発達なものとは異なる。それは男性がいて女性がいて、女性が男性に較べて未発達だと言うのと同じことである。
帰りにお母さんと話しをさせていただいた。せんせいのようになってほしいからとおっしゃった。
私が園長時代に、みんなに教えたことなど何もないのではないかと思う。しかし、私が子どもたちに教わったことは数知れない。数よりも、私自身の人間性を目覚めさせてくれた。みんなには、ただ感謝のみである。
そしたら、あかちゃんは私の先生なのか。
せんせいが大人のよろいであることは言うまでもない。
大人は、よろいで、お互いの序列を認識する。人間性に優れているかどうかではない。この固定観念は、壊しがたい。しかし壊さなければ、人間社会の未来に暗雲を及ぼすだろう。
私は捨ててしまった。

あかちゃんって何だ

〇大人の小さい人ではない

　子どもたちと暮していて、いつもいつも疑問に思うことがあった。
あかちゃんって何だ？
あかちゃんは、大人の未発達な状態であると思いがちである。
そんなことはない。あかちゃんは、私を見抜ける。危険を察知できる。表裏がない。よろいがない。どう考えても、大人のワルイところを何も持ち合わせていない。
私自身も、子どもたちと一緒に暮すまでは、あかちゃんは未発達だからと思っていた。だから教えなければと考えていた。育てなければと思っていた。
しかし、それは違う。
あかちゃんは、大人の小さい人ではない。生きるコンセプトを持って、そのコンセプトに従って毎日前進する人である。そのコンセプトが、大人とは大きく異なるために、大人から見れば、未発達であるかのように見える。
確かに身体は大人に較べて小さいし、大人は箸でごはんを食べられるが、あかちゃんは食べられない。未発達だからではない。あかちゃんっていうのは、そういう特徴を持った人である。いずれ自分で立って歩くし、箸でごはんが食べられる。
あかちゃんはあかちゃんであって、大人の小さい人ではない。

〇生き残りたかったのだろう

　あかちゃんと一緒に暮していて思いつくことがあった。私は、ずっと生きがいや働きがいなどを求めてきた。ただ働いて報酬をいただいて生活しているだけでは、何かが足りない。
私だけではなくて、大人はみな同じである。大人には、……がいが欠かせない。それが見つからないと、何をやってもながくは続かないし、見つかるまで、ブラブラしていることが多い。いわゆる、生きるコンセプトである。

大人の生きるコンセプトは、年々変わったりする。これだと思って追いかけてみても、新しい……がいに出会うと、いとも簡単に変更したりする。今年の私の目標は……ですと言ってみたりする。それは目標ではなくて、生きるコンセプトである場合も多い。
あかちゃんは、生きるコンセプトを身体に内在させて生まれてくる。それは豹やパンダと何も変わらない。豹に……がいがあるとは思えない。あかちゃんにも……がいがあるとは思えない。
しかし、あかちゃんには、明確な、生きるコンセプトがある。
生き残ることである。
あかちゃんの行動のすべては、この生きるコンセプトである生き残ることを原点にしている。生き残ることに必要だったら何でもする。豹が、自ら生き残るためには何でもすることと同じである。
時としてあかちゃんは残虐であったりする。何も食べるものがなければ虫だって口に入れる。他人の食べ物だって平気で食べる。
園長になってしばらくは、このことがよくわからない。大人の概念であかちゃんを見てしまう。
しつけということばにも違和感がなかった。
しかし、おかしい。
もともと、生きるコンセプトが違う。

〇自ら生きるを絶つことはない

　子どもが、自ら生き残ることを絶つことはない。しかし大人になると、自ら生きることを絶つことがある。大きく異なっている。どう考えても、自ら生きることを絶つというのは、ヒトとして未発達のように思える。
人が、自ら生き残ることを絶つ最初の時期は、年々低年齢化しているだろうが、中学生になってからであろう。それでもごくまれである。自らの内在していた生きるコンセプトである生き残ることが、消えてしまったとしか考えることができない。それまでは、人は、生きることに迷いはない。
あかちゃんにおいては、生きることを自ら絶つなどといったことを、想像することすらできない。育児者に路上に捨て去られようが、車の中に放置され

ようが、コインロッカーに置き去りにされようが、床に叩きつけられようが、食べ物を与えられなくても、自ら生き残ることを絶つことはない。どんな過酷な状況に遭遇しても、自ら生き残ることを絶つことはない。
あかちゃんの生き残るコンセプトは、すべてに優先しているし、強固なものである。
あかちゃんは、自ら生き残ることを放棄することはないが、歩けない、体力がない、考えるチカラがついていない、大人の常識とは異なる行動をする。そんなあかちゃんの特徴のために、常に生き残ることを絶たれてしまう危険性を持っている。

○生き残れなかったのだろう

　大昔、あかちゃんが生き残ることは、至難だったのだろう。それは、人間だけではない。生き物すべてに共通していることでもある。哺食される危険が高かったためである。豹などでは、同じことが今でも続いている。鳥でも同じである。
産まれてすぐのあかちゃんを見ていると、とても怯えている。温かい安心できる胎内から外に出た不安だと思えば簡単である。それはそうだ。しかし、その怯え方はフツウではない。しかもずっと続いている。何だろう。生まれてきて、最も生き残りにくい時だからだろう。それは、もう身体に染み着いているとしか考えられない。狼が寄って来るのではないか、ハゲワシが空から飛んで来るかもしれない。猿だって危ない。ちょっと触るとビクッとする。大きな音にもビクつく。ビクつかない時は、お母さんのおっぱいの時だけである。これがずっと続く。
生き残れなかったのだろう。
少なくとも、歩けるようになって胎内から出てくればいいものをと思う。あかちゃんは、おっぱいを飲むことしかできない。生き残る最低のことしか準備しないで胎内から出てくる。

○大人に誤解を与える生き残るコンセプト

　大人には、この生き残るコンセプトがあるとは思えない。消えてしまった

と考えられる。
子ども特有のこの生き残るコンセプトは、時として、大人に誤解を与えてしまうことがある。
あかちゃんは、自分が生き残ることにマイナスであると判断すると、拒否する。
まゆは、ずっと私を拒否していた。あたりまえだが、見知らぬ匂いのゴツゴツした身体に抱かれていれば、いつ喰われてしまうのか、不安になるだろう。夕方、お母さんに抱かれてやっと安心する。その連続である。私の腕の中で、少なくとも喰われないと感じるまで、２週間は経過したと思う。それまで、すぐに身体を固くした。何度も何度も固くしていた。
私がまゆに理解されたのは、私の匂いであると思う。
あかちゃんは、自分のお母さんを間違えることはない。しかし、お母さんは自分の子どもを間違える。匂いを嗅ぐチカラが、大人では衰えてしまうからであろう。
音にも敏感である。眠っていても、音にビクつくことがある。
生き残るためには、危険は察知しなければならない。主として、匂いと音で察知していると思える。獣の匂いがキライである。オレンジや花の匂いで安心する。お母さんの声にやすらぎ、男の低い声に怯える。
とにかく、男は、匂いにしても声にしても、あかちゃんの生き残るコンセプトにマイナスになる。
お父さんの声に安心を覚えるようになるのと同じく、まゆは、私の匂いや声を覚えてくれたのだと思う。しかし、フツウの大人は私のように辛抱強くはない。抱くと必ず泣かれて、手放してしまって、２度と近寄らない。あたかも、自分がワルイことでもしたかのような感覚になる。
あかちゃんの特徴は、大人には誤解を与える。

○生き残れるようになったのに

　現代では、生まれて生き残れないことは少ない。生き物の頂点に立ったおかげで、生まれたばかりの人間のあかちゃんを襲う生き物もいない。彼等にそういう元気はない。

しかし、生まれたばかりのあかちゃんから、生き残れないかもしれない恐れは除かれないだろう。今後もずっとこのままだろう。
生まれてしばらく、生き残ることにすべてのチカラが注がれている。人間では中学生くらいまで、ずっと、生き残るコンセプトが優位にある。
かなり前から、人間のあかちゃんは、安全に生き残れるようになっている。にもかかわらず、あかちゃんの生きるコンセプトは変わらない。これから何万年もかけて変わるのであろうか。生き残ることがあたりまえのコンセプトに変わるのだろうか。その時の、あかちゃんの生きるコンセプトは何だろうか。考えても思い浮かぶものはない。
生き残れる環境になったのに、生き残れないかもしれないと怯えるあかちゃんの特徴は、お母さんにすら理解してもらえないことが多い。
あかちゃんとお母さんの言葉ではないコミュニケーションは、受精してからずっと続いている。自らを分離して胎盤すらつくる。あかちゃんが、自分で胎内で育っていると考えた方がわかりやすい。お母さんには何もわからない。胎内でどんどん大きくなって、音も聞こえて匂いも感じて、そして自らお母さんに、生まれ出るサインを送るようにも思える。お母さんは骨盤を緩めて産道を通りやすくする。無言のコミュニケーションが続いている。
生まれても、お母さんだけが頼りである。機能として完成しているのは、おっぱいを飲むことだけだから、お母さんがいなくなれば自分も生き残れない。
べつに、お母さんに嫌悪しているわけではないが、あまりにも、出てきた環境がワルイ。わけのわからない音はするし、最も恐い獣の匂いは少ないけれども、わけのわからない匂いが充満している。しかも寒い。思ったより身体が動かない。重力が６倍になったから、羊水の中でのように簡単には動けない。フトンに押しつけられるようである。愛想笑いなんてできるものではない。にこやかに見えるように、かわいく身体がつくられていることが、せめてもの救いである。
生き残るすべてを、お母さんに頼っているあかちゃんにとって、この辛い状況を理解してほしいのだが、難しい。かわいいと思ってもらわなくては生き残れない。

〇地球のチャンピオン

　人間は地球のチャンピオンになることが望みだった。誰が言っているわけではない。だが事実そうなっている。今でも変わらない。あたかも、人類の遺伝子に共通に仕組まれたプログラムであるかのように感じる。

他の生き物に、地球のチャンピオンを目指している形跡はない。あるとすれば目に見えない微生物だけだろう。少なくとも、目に見える生き物では考えられない。

地球のチャンピオンにならない限り、生き残れないかもしれない恐れは解消しないのだろう。

望みどおり、人間は地球のチャンピオンになった。もはや、人間を脅かすものは、微生物以外にはあり得ないように思える。それと人間自身だろう。現在では、人間が恐れるのは人間である。

あかちゃんが怯えるのは、主として人間ではない。自分を捕食するかもしれない他の生き物である。

あかちゃんが怯えなければならない状況は、今はない。どんな生き物も、人間のあかちゃんには近づくことはできない。生き残ることでは、人間が最も有利である。あかちゃんが怯えなければならない理由は何もない。

あかちゃんの怯えは、人間が地球のチャンピオンに、なかなか到達できなかった名残りでもあろう。

生き物としてのあかちゃんは、他の生き物と変わりはない。お母さん以外のお父さんや兄弟にさえ怯える。

実際には、みんなあかちゃんの敵ではない。しかし、あかちゃんが、自分の敵と味方を理解するまでに、時間がかかる。

まゆは、私をなかなか理解してくれなかった。怯えている。あたりまえなのだ。

生まれて３ヶ月やそこらで、お母さん以外の人と、１日のほとんどを暮す哺乳類などいない。地球のチャンピオンだから、生き残れるのだが、頭で考えるようなことではない。まゆにとっては、生き残れない状況ができてしまったのだ。ましてや、お母さんと何から何まで異なる私の腕の中で暮すのだ。

○私を見抜けるのは

　あかちゃんが私を見抜けるのは、あかちゃんの生きるコンセプトが、生き残ることにあると気がつくと、わかりやすくなった。私が味方であるか敵であるか、判断する能力に長けている。それは生まれ持ったものでもある。随所に見られる。お母さんから遠い匂いは敵だと思う。お母さんの声に遠い声を出せば敵だと感じる。少し大きくなって、視ることが、視覚が、敵と味方のセンサーになると、私の動作や顔の表情で判断する。

すべては、あかちゃん自身にも理解できないだろう、生き残るコンセプトに由来している。

あかちゃんが何であるのか理解してくると、まゆとの関係も大きく改善するようになってきた。とびっきり機嫌のワルイ時に限って、私が助け船を出すことにした。お母さんと大きく異なる私でも、まゆにとっては仕方がないのだ。女性の保育士の方が、私よりも、はるかにお母さんに近い。匂いにしろ声にしろ身体のゴツゴツ感にしろである。とても女性の保育士にはかなわない。

けっこう忍耐強くまゆと接した。まゆは、私が傷つくほどに、私を無視することも多かった。まゆから見れば、本音しかないのだから、それでいいのだが。

まゆは、私に抱かれている時が、最もリラックスできるようになったと、担当の保育士が話すようになった。まゆがグズついて調子のワルイ時は、私を呼ぶようになった。

いきなり大きな変化が現れて、とまどった。これは何なんだ。まゆは、私を絶対的な味方であると認識したことは間違いなかった。

どうしたらこういうことになるのか。

○お母さん

　お母さんは、無条件であかちゃんの味方である。

少なくとも、人間のあかちゃんは、絶対的にそう思っている。だから、生き残れない危険を冒しても、おっぱいを飲むこと以外に、何もできないまま生まれてくる。襲われても自分で逃げることができない。生き残りにくいの

に。
何もできない間は、お母さんに守ってもらえると絶対的に思っている。何もできない間は何をしているのか。何もしていないわけではなくて、人間として発育する重要な期間を、主として、頭脳と協働している。大人になって、地球のチャンピオンにふさわしいヒトになるために、多くの事を学習している。しかし、あかちゃんは、自分を守ることでは何もできない。お母さんにすべてを依存しているのだ。
あかちゃんは、他の哺乳動物と同じように、しばらくは、口から声を出すことができない。呼吸をすべて鼻で行っているために、空気と一緒に出す声は、鼻からしか出せない。
だからではないが、あかちゃんの泣き声は相当なものである。大人には最大のストレスを及ぼす。電車で泣かれたらどうにもならない。お母さんもオロオロするし周りの大人もどうしていいかわからない。次の駅で降りるしかない。
あかちゃんにとっては、自分の泣き声がリラックスできる声であったら役にはたたない。実際、あかちゃんの泣き声はゆらがない。大人にとっては飛行機の爆音や夜中のバイクで走り回る音と似ている。至急にお母さんに来てもらわなければならない状態なのに、ちょっと待って下さいでは困る。
考えみたらおかしなことでもある。あのような強烈な泣き声では、他の生き物にも居場所を知らせてしまう。危険はもっと高まる。危険を承知で、至急にお母さんを呼ぶか、危険だったら黙るか、大きな選択だったであろう。結局、人間のあかちゃんは、危険を承知で、至急にお母さんを呼ぶことを選択したのであろう。実際そのようになっている。
それほどに、お母さんは、あかちゃんにとって、生き残ることを共有してくれる人なのである。無条件に、いいとかワルイとか考えるまでもなく、そうなっていることが、あかちゃんの生き残りの前提である。
まゆは、保育園に来て、泣いてばかりいた。どうしていいか誰にもわからない。幸いなことに、あかちゃんは寝てばかりいる。その時間だけがスタッフをホッとさせる。しかし、またすぐに戦いがはじまる。そして私を呼びに来る。
あたりまえのことだから、ガマンしないといけないと気づくまでに、時間が

かかった。

とてもお母さんの代役など務まるはずがない。

愛は人が動く押しボタン

〇愛は人が動く押しボタン

　愛がなんであるか、まゆとお母さんを見ているとよく理解できる。
愛は、人が動く押しボタンである。
まゆは、お母さんの声が聞こえると、何をしていても止める。急いで玄関へ行く。お母さんに抱きつく。お母さんは、それを承知していて、おつかれさま〜と大きな声を出す。まゆを動かすのは、お母さんの声であり、お母さんを動かすのは、お迎えの時間である。
まゆが動く時には、必ず、愛がある。
お母さんの声は、まゆを動かす。私を置き去りにして玄関へ跳んで行く。私への愛よりもお母さんへの愛が大きいことがわかる。
愛が、人が動く押しボタンであることは、どんな事例にあてはめてみても納得がいく。私は、保育園から電話があると、たとえどのような用事があろうとも駆けた。最悪のことをイメージしながら走った。そして、フ〜こんなことでよかった〜と思う時、強く、私は子どもたちを愛していると感じた。
愛は、結果でわかるもので、自分が動いた時にはわからない。動いた結果から、ああ〜これは愛だと感じる。すべからく、同じことになる。
会社がピンチにたつことも幾度もある。やらなくてもいいことなのに、身体が動いてしまう。なんでこうなるのか自分でもよくわからない。自分が動いたために、かえって、ややこしくなったりもする。なんでこうなるんだろと考えてみても、どうにもならない。身体が勝手に動いてしまうから仕方がない。会社を愛しているから動いてしまう。しごく単純な構図でもある。
子どもたちを見ていると、愛で動くんだから仕方がないということが、よく理解できる。特に、まだ 2 才前の子どもたちに顕著である。
ある子どもが庭先で、少し高いところに登っていたことがある。私は、他の子どもと戯れていた。まだ高い所は難しいと思いながら、気にしていながら、なんとはなしに見過ごしてしまった。子どもは、足を踏み外して、頭から庭に墜ちた。

幸いなことに、芝生であったために、何事もなかった。しかし、私の顔は真っ白だった。動揺していた。墜ちた子が、ゴメン〜という表情を見せた時、私は感じた。彼は、私の心を察していた。自分が足を滑らせて、動揺させてワルイといった態度だった。私に対して、ワルイ〜と、身体が動いていることがはっきりわかった。まだ言葉にはならないが、はっきりわかった。私は私で、気にしてたのに〜ワルかったと謝った。そして、何事もなかったかのように、ヨタヨタと彼は走り去っていった。もう彼と私の間に、愛という綱が張られていることは疑いもない。絆である。ちょっとしたことで、絆の存在に気づくことがある。
まゆばかり抱いてないで公平にしてくださ〜い。保育士から何度も言われた。まゆには、わかってるから〜早くあっち行けば？と何度も言われたもんである。言われたのではなく、通じた。そうだな。まゆもうなづいていた。子ども達は、私が困ることが何であるのか知っていた。
人が動く押しボタンとはすごいものである。

○絆は本当にある

　絆は本当にある。まゆとお母さんは、綱のような太い糸で結ばれている。まゆだけではない。子どもとお母さんはみんな同じである。それは保育士という仕事をしていると、強く感じるものである。どんなにかわいいと思っても、どんなに気づかってみても、絆にはかなわない。
絆はフツウは見えない。絆が見えるのは、特別に人が動いた時である。
カゼで休みだと連絡があった。しばらくすると、いいですか？どうしても行きたいと言うもんですから、申し訳なさそうにお母さんが連れて来る。もし熱を出したらすぐ迎えに来ますから。なぜなのかわからない。いかにも熱っぽい。もしかして、お母さんの都合かもしれない。こうまでして人が動くのだから、何かがある。やっぱり、担当スタッフの誕生日だった。お昼は食べられずにお母さんを呼ぶはめになった。今日はもういいんじゃないか？に、うんとうなずく。元気ではないが満足している。
こんなところに、絆が見える。
逆もある。いつもお迎えが遅れるお母さんがいた。連絡はくれるのだが、ス

タッフは了解するのだが、子どもにはよくわからない。確かに仕事をしているとタイヘンである。自分だけで動けるわけではないから、残業もしなければならない。

お母さんよ〜に返事もしない。意地悪をしているわけではない。ウソでしょ？と言っている。いつもいつも、もうすぐお母さん来るからね？と聞かされる。まだかな〜ああ〜お母さんかな？駐車場のヘッドライトを見てスタッフが言う。

その度に、窓に向かっていた足が止まって、次第に動かなくなる。お母さんが来てもそのままである。もっと大きな声で、ゴメン〜と言えばいいのにといつも思っていた。誰がワルイわけではないが、次第に絆が細くなっていく。なんでもないことである。子どもに謝ればいい。それだけのことだと思った。

絆は、人が動く押しボタンが、特別に連結されている状態である。

何をさておいてもである。まゆとお母さんのように連結されている。まゆと私の間も連結されたと思う。連結されると、お互いを気づかうようになる。ちょっとした事が察知できるようになる。うん？眠いのか？と察知できる。

○大人の社会でも愛は人が動く押しボタン

　戦争地域に、ボランティアで、現地の子どもたちのために乗り込む人がいる。そして人質になり、大騒動になったりする。避難勧告が出ているのに、どうしてですか？と聞かれる。迷惑だと言われて意気消沈する。自分でも、上手く答えられない。愛を上手く答えることなどできない。

山に登って、遭難して、迷惑だと思わせる人も多い。こんな気象状態なのにと質問される。上手く説明ができない。山を愛していることを説明できるはずがない。

地震、自分の居場所からは遠いけれど、身体が動いてしまう。ボランティアの募集を調べる。会社にはカゼだとウソをついて出かける。

観葉植物を育てている。人間とどっちが大切なんだ、などと怒られながら、年々増やすのが楽しみである。少し寒くなったら、電話をして玄関に入れてもらう。忙しいのにと文句を言われるのを承知である。身体が動いてしまう

から仕方がない。
愛は説明ができない。自分が動いて感じるものである。
私の動くことのすべてが何であるか、今は、私は説明づけられる。それを子どもたちに教わった。
著明な会社を手に入れたがる。そして買収に動く。人が動いたのだから愛である。何かを愛していることは間違いない。何だろう。よくわからなくなる。愛は愛なんだけど。多分、人が動く押しボタンには違いないが、子どものそれとは少し異なっているように思える。
昇格試験がある。必死になって勉強する。人が動いているのだから愛である。でもちょっとおかしい。受験戦争は何だろう。人が動いているのだから愛が絡んでいる。だけど子ども達の人が動く押しボタンとは、ちょっと違っている。
大人は複雑である。いろいろな動きをする。子どものように単純ではない。
私は、子ども達に人が動く押しボタンを教わって以来、子どもの、人が動く押しボタンのみで押し通すことにしている。ちょっとメンドーなことになることも多い。けれども、これは人間として、どうしても通さなければならないことだと確信している。
子どもの人が動く押しボタンと、大人の人が動く押しボタンは、どこが違うのか。

〇愛しているもの

　わかりにくいことが一つある。自分の動いたことが、自分を愛しているのか、動いた対象を愛しているかである。
まゆはわかりやすい。まゆが自分のために動くのは、生き残りたいからだ。
まゆがお母さんの自動車のドアの音がわかるのは、お母さんを愛しているからだ。
これが大人になるとシンプルではなくなる。
山登りがスキである。毎年登らない年はないし、有名な山で登っていない山は数少ない。登っていて考える。山を愛しているのだろうか、それとも自分を愛しているのだろうか。自分の健康のためか、それとも百名山を登ってし

まいたいのか、自分の骨休めなのか、自慢したいのか、はっきりしないが、また山に向かう。説明がつかないから愛には間違いはない。
日本の高い山の順番に踏破すると豪語して、実際にはじめて、２番目に高い山で、高山病で死にそうだと感じたことがある。どうも動機が不純だと良くない。
最初は動機が不純であっても、今は違っているように思う。
山を愛している。山の中にいるとホッとする。
会社で仕事に携わる。毎日会社に行くのであるから、会社を愛していることは間違いない。報酬をいただくためであったら、他の会社でも良いことになる。少しでも実績を上げようと懸命になる。競争する。評価が低ければ嘆いて失望する。実績を上げなければならない仕掛けにはまってしまう。自分を愛しているからであろうか。単に負けたくないからか。
仕事の内容や会社を愛していると言えると好ましい。
オリンピックに出場する選手が言う。自分のために楽しんできます。しかし日本のユニホームは脱がない。明らかに日本の国を愛している。しかし負ければ悔し涙になる。自分を愛している。
自分の競技を愛しているし日本を愛しているのが好ましい。
まゆのようにシンプルになるのが好ましい。まゆは生き残るコンセプトが内在しいるが、大人は、生き残る他にコンセプトを見つけなければならない。
私のコンセプトはクリエイティブだし挑戦である。行動は、まゆ的人が動く押しボタンに従っている。

○人が動く押しボタンは２つある

　人が動く押しボタンは、２つある。
一つのボタンは、もちろん愛である。まゆ的押しボタンである。
もう一つのボタンは、よろいである。
よろいのボタンはメンドーなボタンである。
大人になると、よろいの押しボタンは、とにかく常時押されている。ほっておくと、私の行動は、すべてよろいに押されて動いていることになる。富士山から高い順に踏破した、などと、自慢になるかどうかわからないことにま

で、よろいのボタンは押される。何事にも、常に押されている。
会社の自分に対する評価が低いと不満を持つ。私のよろいに似合わないと思うからの不満である。
オリンピック選手が悔し涙になる。そして方法は問わなくなって、あってはならないことに手を出すこともある。自分のよろいに動かされている。
よろいが押している、人が動く押しボタンは、始末がワルイ。
杖の助けで歩いている高齢の方が、電車で前に立った。すっと立てばいいものを躊躇する。これは何だろう。みんなが視ているから、立たなければならないとよろいは考える。そして立つ。もし人を愛しているならば、何も考えずに立つ。
他者の業績を自分のものにしようとして動く人もいる。人が動いているのだから愛なのだろう。はっきり言って、相当に分厚いよろいを着ている。他者の業績を盗むことが、どういうことかも判断できないほどの、分厚いよろいである。そして、まんまと成功すると、そのよろいは更に厚くなる。世の中は、人間の中身を見ているのではなく、その人が、まとっているよろいを見ていることを、よく承知している。成功すると、次の獲物を狙う。こんな人も多くいる。
子どもには、このような人が動く押しボタンは一切ない。よろいがないのだから。
愛の押しボタンとよろいの押しボタンがわかりにくければ、子ども達を観るとよい。子どもたちが動いていることが愛の押しボタンである。
子どもたちは、立派な保育園ですね〜などとは言わない。大人はもう、人が動く押しボタンの区別ができないだろう。意図して動いたら、それはすべてよろいの押しボタンに動かされているなどと考えること自体が、もうおかしい。
自分を愛していると感じる時は、明らかに、自分のよろいが自分を動かしている。仕事の遅れを、ウソも方便で逃れてしまうのは、とりあえずの責任を逃れるためで、自分を愛している、自分のよろいが自分を動かしている。
山で遭難しかけたことがある。雪道を滑落して、片方の足を雪から掘り出すのに３分もかかってしまうくらいの深みにはまってしまった。これで夜になったら凍え死んでしまうと思った。タバコは、すごいモノだと思った。一

服したら、動転していた自分がおかしくなった。どうしても電話したくなった人がいた。こんな所でモタモタしたくない。上に上がろうとするから歩くことになる。上に上がればよいという常識も、時と場合がある。下に下れば雪の中を泳いで行ける。この後も危機は続いたのだが、どうしても電話したくなったことが、今から考えると、勝負を分けたように思う。実際に、４時間後には電話できた。誰を愛しているのか、はっきりわかった。
愛のボタンによって動かされるものは、愛しているからと、自分に説明することができるが、他者には、そう簡単には説明ができないことが多い。説明したくないことも多い。

○よろいのボタンと愛のボタン

　大人の人が動く押しボタンには、よろいのボタンと、愛のボタンの２つがある。
よろいのボタンは、まゆには無関係のボタンである。
私が自分を変えたいと考えて実行したことは、私の愛のボタンを引き出すことであった。
それは結果的にわかったことである。大人は、自分のよろいのために動いたのか、愛のボタンで動いたのか、動いたあと考えるとよくわかる。動く時にははっきりしない。おおむね、よろいでしか動かない。
私があかちゃんと暮しはじめた時、最初は、自分のよろいのために、保育園の園長をやったのだと思う。自分の勉強のため、後々役にたつだろうから。そして、保育園が成功することは、自分の将来にプラスになるから。とは言いながら、周囲の反対を押し切っての保育園の立ち上げは、何だったのだろう。どう見ても割りが合わない。失敗する確率が高かったのである。ことばでは、将来の会社の事を考えて、育児から離れないためにと言っていた。
こっちは、愛のボタンであったに違いない。
しかし、総じて、私はよろいのボタンで動いていたことは間違いない。
しばらくして、まゆが来て、私は変わっていった。私の変わり方は、生き物として、人間としての、生身にかかわることになっていった。
人がこうであることを知らなかった。生まれた時そのままを、成長とか発達

とか教育とかの麗句で、結果的によろいとなって、生身を覆い尽くしてしまう。愛のボタンが隠されてしまう。
もう考える余地はない。うかつであった。このまま人生を送れば、取り返しのつかないことになっていた。よろいを捨てなければ、自分が動いていることが、生身の自分であるかどうか、いつも考えて迷うことになる。よろいを捨てさえすれば、すべて愛のボタンで動くことになる。
自分の報酬がいくらか見ることもない。ボーナスの評価がどうであったか気になることもない。昇進がどうなるか予想もしない。そうしないと、いたづらに嫉妬心や競争心の根源である、よろいが目を覚ますことになる。

○３つ目の人が動く押しボタン

　実は、人には、３つ目の押しボタンがある。
あかちゃんが、お母さんのおっぱいを飲むのに、愛やよろいが、ボタンになっているわけがない。
子どもだけではなくて、大人でも、競争したがったり、ゲームで遊んだり、映画や絵本が好きだったりする。ジェットコースターやゆりかごに揺られることが好きだったり、自分の意志ではなく、もともと身体に備わっていると考えるしかない、いくつかのものがある。人間であれば、万人が共通に持っているものである。多分、ヒトが生き残るために備わったものであろう。普遍である。
この、自分の意志ではなく、愛でもなく、よろいでもない、人を動かすボタンは、子どもたちと暮していると、はっきりわかってくる。
生き残るコンセプトで動いているボタンである。
あかちゃんの初期の頃は、その行動のほとんどが、この３つ目の、人が動く押しボタンで動かされている。
一般的には、この３つ目の人が動く押しボタンの事を、反射という。
愛に押される人が動く押しボタンと、よろいに押される人が動く押しボタンと、身体に内蔵されている３つ目の人が動く押しボタンである。
３つ目の人が動く押しボタンは、人間だけにあるわけではない。生き物すべ

てにある。生き物の、動く押しボタンである。人間のあかちゃんも、生まれた時は、この生き残るボタンで動く。人間の大人だけが、愛のボタンとよろいのボタンという２つのボタンを、ダブルで持っている。
よくテレビで、動物の親子の愛が放映される。サケが生まれた河に戻ってくる様が映される。豹が親子で一緒に暮らす様が写る。これはすごい。親が子どもを想う愛はすごい。
これは愛なんだろうか。
生き物は、自分を犠牲にしても、子孫を残すシステムを持っている。だから生き物を生き残らせた、と考える方が自然である。人間も同じであろう。
愛は人が動く押しボタンであるが、豹のお母さんが、子どもの豹を身をもって守るのは、生き残る押しボタンに押されていると考えた方がわかりやすい。人間のお母さんも同じである。あかちゃんが生まれると、無償の行動をあたりまえのようにする。何をさておいても、あかちゃんのもとにかけつける。
生き物には、生き残る押しボタンは消えないように思われる。
しかし、時として、この子孫を残すシステムが、壊れたのではないかと思われる現象が、起こることがある。生き残る押しボタンが消えるのではなく、隠されるのだろう。よろいに隠される。
もし豹のお母さんが、子どもを守らないとすると、生き残る上で、もっとプラスの事があるためか、あるいは、生き残る押しボタンが隠されているかの、どちらかである。
人間のお母さんも同じなんだろう。豹のお母さんにはよろいはないが。

〇３つ目の人が動く押しボタンのプラス１
　あかちゃんの反射にはいくつかのものがある。おっぱいを飲むことだけではない。大人になっても、食べ物をのみ込むことや、歩く時に踏む出す足を間違えないことのように、考えてやっているわけではない行為がある。しかしこれらは、人が動く押しボタンと混同されることではない。
まゆが少し大きくなると、熱心に、としか言いようがない動きをはじめる。まゆだけではない。みんなそうだ。夢中になるのだ。ずっと同じ絵本を読ん

でくれと言う。何度も何度も。ずっと室内の滑り台をすべる。ずっとボールを壁に向かって投げている。時間など関係ない。ずっとそうしている。おもしろいのだ。大人だってずっとパチンコをしたりゲームをしている。ずっと本を読んでいる。スキーをしている。サッカーを観ている。ずっとやっている。
人が動く押しボタンだろうか。
エクスタシーというものがある。人間にしかないのではないかと思う、遊びのエクスタシーというものがある。人間誰でもがやってみたくなるものだ。共通している。お金にもエクスタシーがある。権力にも。人間が共通して、人が動く押しボタンとは異なる動きをしたがるボタンがある。よろいのボタンと協働しがちである。もちろんセクシャリティーもである。
この３つ目の人が動く押しボタンプラス１のボタンは、重要なボタンである。まゆがいろいろなことを学習するのにも、このボタンが多く使われたように感じる。愛のボタンでは説明がつかない。もちろんよろいのボタンはまだないし、生き残る反射のボタンも終わっている。おもしろい、がキーワードである。

〇一見愛のボタンは複雑

　愛のボタンが人間に加わったことは、人間という生き物が、生き物として集団として、大きなチカラを持つことに、パワーとなっただろう。
愛のボタンだから、正しいことだとか、社会的に好ましいことだとは限らない。
２才になると、横で楽しそうに遊んでいる仲間のおもちゃが欲しくなる。勝手に取り上げてケンカになる。毎日これが繰り返される。スタッフは、この調整に走り回ることになる。これも、愛のボタンで動かされているもので、仕方がないとも言える。もし、おもちゃよりも、愛している仲間がいれば、おもちゃを勝手に取り上げることなどしない。自分が遊んでいるのに、どうしても欲しがる仲間がいると、もしその仲間に、愛のボタンが動けば、おもちゃを、どうぞと差し出す。おもちゃへの愛と仲間への愛の大きさ比べになる。

いくらおもちゃを横取りしても、愛のボタンには、よろいのボタンのような戦略や作戦がない。ここが大人のよろいのボタンに動かされるものと違っている。子どもの愛のボタンは、あくまで、おもちゃや仲間を愛しているから動く。
一見、愛のボタンは複雑である。大人から見ると、もう〜なにやってんの〜という具合に思える。いかにも自分の事しか考えない、自分勝手な行動にしか見えない。
よくよく観ると、しごく簡単な構図である。生身の自分の愛のボタンが、感じるままに動いているだけである。お母さんが現れると、もうおもちゃなどどうでもよくなる。まゆは、私が現れると、他の事はどうでもよくなる。順番があるのだ。順番は、かなりきっちり決められている。そしてその順番を変えることはけっこう難しい。
大好きなプリンだから、誰よりも大きくして欲しくて、スタッフにお願いする。たまたまおやつの時間に、私がまゆのところえ行くと、プリンを前にして、まゆは、困った顔をする。おやつがプリン以外だったら、半分食べる？と差し出す。プリンでは、困った顔をして、結局半分差し出す。ああ〜ゴメン〜今日は忙しいからおやつ食べてらんないからと言うとホッとする。
まゆの愛のボタンが動く順番は、少なくとも、私の方がプリンよりも優位にあるようだ。
このように、子ども達の愛のボタンは、単純でわかりやすい。

〇愛のボタンの大きさや機能はみんな同じ

　愛のボタンは、個人差がある。１才でも個人差がある。大人になると、もう較べることができないくらいに、大きさやカタチや機能が異なっているかのように思える。しかし、ずっと、子どもたちを見ていると、愛のボタンは、最初は、すべてのあかちゃんに共通の大きさと機能があるように思える。
人が動く愛のボタンには、大きさやカタチがあると考えるとわかりやすい。そして機能がある。そしてすべて同じである。
愛のボタンは、生まれた時が、最大で最高にキレイであるかのように感じ

る。しかし機能はない。
多分、産まれた時の愛のボタンは、限りなく大きく、球形をしているのだと思う。あかちゃんが動くことすべては、この大きな球形の愛のボタンと、３つ目の、生き残るために備わっているボタンによってなされる。
よく観ていると、納得できる。
おっぱいが欲しくなると、サインを送る。それでもスタッフが反応しなければ、ところかまわず泣く。眠りたければ勝手に眠る。すべては生き残るために動いている。さすがに虫をつかんで口に入れることは、もうない。みんなお母さんがお迎えに来る時間を、生物時計のように正確に当てる。ほとんど狂いがない。10分前からの行動も、様々だが、決まりきった行動をする。もうすぐ最愛の人に会えることがわかっている。まゆも、10分前になると、私をほって自分なりの行動をする。まゆのお母さんのように、髪を束ねたりはしないが、まゆ独特の動きをはじめる。親子を観ていると、どうにも入り込めない何かを感じる。
みんな同じである。何も誰も変わらない。お母さんが不在であれば、お父さんになるだけで、最愛の人は、はっきりしている。

○愛のボタンはよろいによって隠される

　みんな同じ愛のボタンを持っていながら、みんな異なってくる。
いつ頃からか、愛のボタンに変化が現れはじめる。
園長先生おはようございますなど必要はなかった。
家族にはよろいがある。そのよろいは、風習や習慣や伝統やコンセプトなどと言われる。家族にもあるし、個人にもある。会社にもどのような集団にもある。保育園にもある。
そのよろいのために、子どもに、園長せんせいおはようございますと言わせる。
保育園によくあることは、うちの保育園では〜……ですからよろしくおねがいしますというものがあって、これがけっこうメンドーなことが多い。保育園の権威や体面を保つためのものもある。お母さん自身にもある。お父さんにもある。

次第に、あかちゃんの限りなく大きく球形をした愛のボタンは、大人達のよろいによって翻弄されはじめる。えんちょうせんせいおはようございますになってしまう。
子どもたちと暮していると、愛のボタンが、よろいによって隠される様子が、よく見える。一般的には、よろいによって愛のボタンが隠されることを、フツウのことばで、成長したとか発達したとか言う。
せんせいにあいさつできることが発達したと言う。しつけということばがある。大人の行動の規範を子どもに押しつけていることばである。しつけの基になっているのは、親や家族や会社など、集団の風習や風土である。よく勉強して、いい学校に行って、競争に打ち勝って、そして社会で羨まれる職業について、こんなイメージであることがフツウである。
当然、子どもであっても、それにふさわしい行動が望まれる。会社などの集団であっても同じことになる。
すべてよろいのことである。家族の期待もよろいである。
Ａちゃんよりボクの方が上手？と聞く。体力が違うのに上手も下手もない。ムダな概念が、真っ白なあかちゃんに植えつけられる。２才過ぎて３才になると、このムダな概念がどんどん多くなる。子どもたちの理解力が増すからである。
そして、愛のボタンは隠されていく。限りなく大きく球形をしていた愛のボタンは、月が欠けるように、小さくなり、カタチもいびつになっていく。
小学校に入学すると、よろいが更に厚くなる。競争が顕著になるからである。何事も競争だということを言い聞かされる。
愛に他者との競争は必要ない。

○愛のボタンは育つものではない

　愛のボタンは育つものであろうか。愛は育つものだろうか。そうではない。愛は薄れていくものである。愛のボタンは、小さく隠され、カタチもいびつになっていく。
人が動く押しボタンはリーダーシップに向かって育まれる。発達する。しかしボタンそのものは、ほっておいたら、いびつに小さくなる。

生まれたばかりのあかちゃんは、未発達だから、愛もゼロ状態だと思われていることがある。本当だろうか。そしたら、まゆとお母さんはどうなるのだろう。おっぱいをくれるから、生き残るために動いているだけだろうか。愛はないのだろうか。愛のボタンで動いているのではないのだろうか。

どう考えてもおかしい。

愛のボタンは育つものではなく、隠されていくものだろう。ボタンが有効に使われるように、ボタンそのものが、従うボタンから動かすボタンへと移り変わる。発達する。しかし、問題は、隠されてしまった愛のボタンだろう。

まゆがお母さん以外のすべてを恐れるのは、生き残ることへの不安である。恐れて、お母さんから離れないのは、生き残るボタンに動かされているからである。愛がまだ形成されていないからではない。

生まれた直後が、最も愛は大きい。何も、愛のボタンを隠すものがないから。

私が敵ではないと認識すると、今度は愛のボタンだけでまゆは動く。遊んでいたおもちゃも、私の顔を見ると手渡す。私が、いらないなどという顔をすると、悲しそうな顔をする。計算がないだけ、ストレートである。お母さんが来ると、私はいきなり置き去りにされる。バイバイさえもしないことがある。なんともわかりやすい。

愛のボタンは育つものではない。愛は人が動く押しボタンだが、人が動く押しボタンは発達する。

まゆとお母さんを観ていると、豹のお母さんと子ども達と何も変わらないところがある。２人とも、生き残る押しボタンで動いている。お母さんが１番安全である。まゆは、お母さんにおかしを差し出す。それもかなり早い時期である。生き残る押しボタンが、お母さんの機嫌を損ねないように、気を遣っているのであろうか。

確かに、生まれてしばらくは、生き残ることに全力を注ぐ。愛のボタンは全開しているが、動くヒマがない。生き残ることに少し安心できるようになると、愛のボタンは動きはじめる。もともと全開しているのであるから、ガンガン動きはじめる。

○あかちゃんにだけ全開の愛がある

　人が動く愛の押しボタンが、生まれた時が最高の大きさで最高にキレイだと考えると、納得のいくことがいくつも出てくる。

なんともやりきれない事件が発生する。愛はないのかな〜と思わせる事件も多々ある。人が動く愛の押しボタンはどうしたんだろうと思う。子どもでは少ない。いくら意地悪でも、そこまではない。この、人に愛のボタンはあるんだろうかと思うような出来事は、幼児ではない。しかし、愛のボタンが隠されるのは、次第に年令が下がってきているようには思える。小学校高学年では、背筋が寒くなる出来事が起こりはじめている。

もし、今の私が、あかちゃんと一緒に暮したならば、あかちゃんの愛のボタンを隠すようなことはしない自信がある。まゆに教わったのだから。

まゆは、もう大きくなっているが、多分、愛のボタンが隠されていない人になっていると思う。それにあのお母さんである。

よろいが愛のボタンを隠すが、私によろいがない限り、あかちゃんの愛のボタンを隠すことはない。あかちゃんは、一緒に暮している大人のよろいの影響を、最も大きく受けてしまう。

もし私が、仕事の成果として、保育園の成功を望んだのであれば、一緒に暮したみんなの愛のボタンは、少なからず隠されただろう。成功したかどうかは結果だから、そんなことは、後になってわかることなのに。

まゆに教わるまでわからなかったことなのに、他者のことを論じるのはおかしい。昔の自分に向かっても、言えることがある。あかちゃんと一緒に暮すのだったら、自分の中の固定観念やよろいを、捨ててみるとよい。もちろん価値観もである。

そこで、何を目指すことになったかは、わからないが、少なくとも、背筋が寒くなるような出来事は起こりはしない。愛のボタンには、そういう出来事のシナリオはない。よろいのボタンにしか、背筋が凍るようなシナリオはない。

あかちゃんにしか、全開の愛のボタンの状態を観ることはできない。

○３つのボタンの優先度

　人が動くのは、生き残らなければならない反射の押しボタンと、生まれ持ってくる愛のボタンと、よろいのボタンの３つがある。もちろん大人には、生き残るボタンはない。隠されてしまう。
この３つのボタンは、どういう関係になっているのだろうか。
これは、１人１人が、自分で考えればすぐわかる。大人が動く押しボタンは、よろいのボタンが最優先している。自分が何物であるかを、よろいで表現する。生身はできるだけ隠す。名刺を多用する。名刺にできるだけ重要人物らしく書けるように働きかける。主任研究員と書いていいかと聞く。マネージャー補佐と書けるかどうか聞いたりする。それを平気でやる。もうよろいが歩いているとしか考えられない。よろいが息をしている。
時々、愛のボタンが優先している大人もいる。バカにされることも多い。子どもっぽいのである。そして、よろいを前面に出さないとダメだと思いはじめる。
勇気とか先駆とか変革などは、よろいから生まれることはない。愛のボタンから生まれる。例外はない。
計算など関係ないのだ。よろいは、難しいプロセスを省いて、結果を欲しがる。結果を目指す。販売目標など決めたがる。結果を目指すとロクなことはない。
生身の大人はどこにいったのだろう。
まゆと別れてずいぶんになるが、私は、まゆのよろいを知らないままである。これは助かる。まゆのよろいは見たくない。
よろいが少し厚くなると、いつも、よろいの人が動く押しボタンが、愛のボタンのジャマをする。愛のボタンはなかなか押されなくなる。もちろん、よろいのボタンができてくると、生き残る押しボタンは薄れてくる。
愛のボタンが、よろいのボタンに負けることは、どんな場面でも見ることができる。
仕事の成果がある。友達に分ける。新入社員の時は、そんなふうに考えたいが実行しない。２年では、成果を友達に分けるなど考えもしなくなる。３年では競争相手になって、足を引っ張るかもしれない自分に驚く。逆はない。
ここで勇気をふりしぼってと思うこともある。リスクが大きくて結局動かない。観客席にいるのだ。

大人の人が動く押しボタンの優先度は、はっきりしている。よろいのボタンが最優先である。愛のボタンが優先している大人を見つけることは難しい。あかちゃんの人が動く押しボタンの優先度は、はっきりしている。まだよろいの人が動く押しボタンはないのだ。

〇こころは愛の器と考えるとわかりやすい

愛は、一般的にはわかりにくいし、人の数だけ説明があるようにも思える。私の愛も、私なりの自分への応えである。私の愛は、私なりに変えがたいものになった。

こころも、愛と同じように、何かわけがわからないところがある。

あかちゃんと暮す時、愛やこころがわけわからないでは済まされない。あかちゃんが愛のボタンで動いているからである。愛は、人が動く押しボタンである。恋のボタンは、生き物の後継させたい欲求に、愛のボタンが積み重なってできたものだと考えると、わかりやすくなる。名前を聞いただけでも、ドキドキがはじまる。

こころは、愛の器である。

こころがどこにあるかまだよくわからない。

愛が、人が動く押しボタンと考える時、こころは愛の器になる。

まゆが、お母さんの声を聞いて跳んで行く姿は、愛そのものであり、こころがあると思わざるを得ない。こころは愛の入れ物であり、よろいが入る余地のないものである。

こころが消えるような事件が何度もあった。そして続いている。心を開けばと言う。こころは閉じたのではなくて、よろいによって隠された状態にある。もちろん、愛はその中にある。こころに邪悪なものは入らない。入っているのは愛だけである。

こころを隠したもの、よろいを取り除けば、こころが消えるような出来事も少なくなる。

〇こころが広い人と狭い人がいる

こころが広いと言う。確かにこころが狭いと感じる人もいる。こころは愛

の器だから、愛のボタンの大きい人もいるし、小さい人もいることになる。愛のボタンはみな同じだろうから、よろいに隠された部分が大きい人と、よろいに隠されていない部分が大きい人がいることになる。
こころが広いとか狭いではなくて、よろいが大きいか小さいかになる。
小さい頃から大人のよろいの影響を受けると、子ども達のよろいは大きくなって、愛のボタンを隠してしまう。
私は、子ども達と３年間を過ごした。私が願ったのは、少しでも、私の愛のボタンが影響すればいいのにということだった。少なくとも、私のよろいの影響を受けるようなことがあってはならない。２年目からそう思うようになった。１年目は私の学習の時間だった。まゆに教わった。
まゆが今どうなっているか、わからない。
しかし、私には自信がある。他の子ども達にも、同じように自信がある。少なくとも、私のよろいの影響を、大きくは受けていないだろうから。みんなとは絆ができていた。少しは、私の愛のボタンの影響を受けていてくれただろう。
まゆに自信があるのは、あのお母さんだからだ。きっと、何よりもまゆを優先してくれたと思う。お迎えの時間がいつもピッタリだった。自動車を出て、バタンとドアを閉める音さえ、まゆは知っていた。まゆからは遠いのに。同じ時間に同じ仕草で同じドアの閉め方をしたお母さんである。きっと、自分のよろいを、まゆに覆いかぶせはしないと信じている。
大人になって、自分のこころが隠されているのではないかと、気がつけば幸いである。もちろん、愛はこころの中にあるから、こころが隠されれば愛も隠される。
あかちゃんのお母さんは、幸いなことに、こころが表に現われるように仕向けられている。あかちゃんと共働して、生き残るコンセプトが、大きく出てくるからである。あかちゃんが危険であったら。身を挺するようにできている。理屈ではない。
もしお母さんに、鋼鉄のよろいが出来上がっていたならば、ひょっとして、こころが表に現われない可能性もないわけではない。蘇らない可能性である。
鋼鉄のようなよろいでは、人の愛の器であるこころは、あかちゃんを産んで

も、ずっと隠され続ける可能性がある。お母さんは、出産の時に、一気に隠されたものが現れるのがフツウである。お母さんになるチャンスに恵まれないからといって、よろいを剥ぎ取るチャンスがないわけではない。自分のこころが隠されていると自覚すれば、どんなことでもするだろう。もし、人やモノを、愛すべきなんだと気がついたら、それしか、人間は生き残るすべがないことにも気がつく。

○育てのコンセプト

愛のボタンを隠さないためには、どんなことがあっても、ゼッタイに自分を守ってくれる人がいることが大切である。たとえ、一般的にはワルイと言われることをしても、それでも味方になって守ってくれる人が必要である。お母さんがその典型である。

女性のコンセプトは、育てにあるのだろう。育てとは、発育することを支援することである。育ちには対価がある。米は収穫して収入になる。しかし、あかちゃんが育っても、何の対価もない。何の対価もないことを、自然に行う。お母さんの身体に、育てのコンセプトは、根づいているように思える。

ライオンだって同じことをする。でもちょっと違う。ライオンのライオンが動く押しボタンは、生き残るボタンだけである。愛のボタンやよろいのボタンはない。ライオンのお母さんが、子どもを育てるのは、ライオンとして生き残るためである。たとえ自分が閉ざしたとしても、子ども達が生き残れば、ライオンは生き残れる。すべからく、生き物は、このようになっている。

ヒトのお母さんとあかちゃんの関係も同じである。しかし、ちょっと違う。ヒトに備わったすごいものがある。生き残ることを超えて動こうとするボタンがある。この愛のボタンが、育てのコンセプトを生んでいる。

まゆとお母さんを観ていて、保育士を観ていて、生き残るを超えたものを感じる。どの女性も同じである。計算上、子どもと一緒に暮さない判断をしたら、それはもったいないと言わざるを得ない。もともと備わっている貴重なものを、使わないことになってしまう。天秤の問題だが、子どもと一緒にいるストレスも大きいし、子どもに、自分が満足するよろいを着せられないと

判断するストレスも大きい。逆に、備わっている育てのコンセプトを、使えないストレスも大きいだろう。どっちの天秤が重いのだろう。
オトコには、残念ながら、育てのコンセプトが備わっているようには思えない。信念として自らを固めて、学習して、育てのコンセプトを身に着ける以外にはないのだろう。

〇子どもたちは人が動くボタンでしか動かない

　あかちゃんの人が動く押しボタンは、生き残るコンセプトのボタンと愛のボタンのみである。これが人間の原点であると思う。人間以外の生き物の原点は、生き残るボタンのみである。よろいのボタンで動くことがないことが、人間の原点である。あかちゃんを見ていて、そう思う。
残念なことに、大人は、あかちゃんを、このようには観ないことがフツウである。あかちゃんが原点ではなく、あかちゃんは未発達だと思われている。あくまで大人の視点を原点においている。正常な社会生活ができるように、未発達だから、導かなければいけないと考える。あくまで、大人が正常なのである。
そうではない。
そもそも不必要なよろいのボタンで動かない、動けないあかちゃんの方が、よっぽど人間らしい。人間の原点にはふさわしい。
大人のあらゆる不条理さは、すべからく、よろいのボタンに押された行動にあることは、毎日の様々な事件の１つを取り上げても理解できる。ましてや、人の歴史を、よろいのボタンをキーワードに考えてみても、理解できる。
大人になって失ったものはないのか。
大人になって不必要に加わったものはないのか。
どう考えも、人間らしさが大事だとすると、あかちゃんに、その原点があると考えるのが、フツウだろうに。

自分で育つ

○自分で育つ

　一般的に、あかちゃんを育てるという。しつけをすると言う。間違いではないかと思う。
あかちゃんは自分で育っている。
ずっとあかちゃんと一緒に生活して思ったことである。
一見、何もできないようでも、あかちゃんは、自分でトレーニングをしていることも多い。
どちらかというと、育てるという名目で、あかちゃんが自分で育っていることをジャマしているのではないかとすら、感じる時もある。
子育てという。誰もおかしいとは思わない。子育て支援という。子育てをする女性の労苦を、少なくしてあげられないかと考えて、実行することのようである。
子育ても子育て支援も、誰もおかしいとは思わない。
確かに、あかちゃんと一緒に生活することはタイヘンである。お母さんを支援することがおかしいとは思わない。しかし、あかちゃんが、自分で育つのを支援することを、何というのだろう。ことばがないのだ。
育ち応援なのか。

○胎盤さえも自分でつくる

　あかちゃんが、自分で育つことで、最初にやることは、自分から胎盤を分離して、自分の環境を整備することであるらしい。あかちゃんと胎盤の遺伝子情報は同じである。お母さんは、子宮を用意し羊水を準備する。あかちゃんが子宮で育つ環境を整えている。
お母さんはあかちゃんが自分で育つ環境を整えて、あかちゃんは自分が育つ環境を整える。
そして、あかちゃんは、高速進化して、ヒトになるために、自分で育つ。
ある時は魚であったりする。ものすごくながい年月を水で暮していた。羊水

の中で、少ない重力で暮すことが、１番安全であることを承知している。
あかちゃんの遺伝子は、進化上ではゼロクリアーする。なぜ、お母さんとお父さんの今の遺伝子を受け継がないで、新しくゼロの状態から始めるのだろうか。これも安全のためだろう。お母さんやお父さんの、今の遺伝子は、とても使い物にはならないのだろう。ずっと日光や重力に襲われてきているのだから。お父さんとお母さんが持っている、最初のものでスタートする。子宮という安全な環境で、ゼロから進化してヒトになった方が、リスクが少ないのだろう。
しかし、ゼロからはじめることは、それなりにリスクもある。高速で遺伝子をリライトしなくてはならず、ひょっとしてミスを起こす可能性がないとは言えない。
お母さんが、つわりで食事がノドを通らない時、実際に体重も一時減るのだが、食事量が減って、微少な栄養素が摂取できないことがある。ビタミンなどである。
遺伝子のリライトに欠かせないビタミンが欠けていれば、ミスを起こすことも考えられる。
あかちゃんが、胎生の時期に、どうしても育っておかなければならないことがある。
生まれた直後の事である。お母さんを判別すること。安全を確保すること。おっぱいを飲めること。この３つしかないが、確実に育っておかなければならない。
お母さんを判別できなければ安全を確保できない。狼を判別できなければ安全を確保できない。おっぱい以外の食べ物を判別しなければ安全を確保できない。いずれも、匂いと味覚を完成させる。嗅覚と味覚と聴覚である。
おっぱいを飲むことは反射なので、出生直前に機能を発現させる。おっぱいだけ飲めれば生き残れる。みんな自分で育つ。

○６倍もの地球のチカラ

　まゆは、３ヶ月であったが、哺乳びんでミルクを飲むことしかできなかっ

た。手は、まだ、私の顔に触ることしかできず、せいぜい、ガラガラのようなものを振って、遊ぶとも不思議がっているとも思われるような行動を示すだけである。足は、これから歩くのだろうかと思わせるような、なよなよした状態である。
考えてみると、お母さんのお腹にいる時期では、水の中で生活し、重力が１／６であった。ひよわではあったが、宇宙遊泳と同じように、海の中と同じように、スペースはなくとも、けっこう動ける状態だったであろう。
動くこともできたし、耳も何かしらの音が聞こえ、味覚もあって、羊水の味にも慣れていた。
味覚と嗅覚はつながっていたと考えられるので、嗅覚は機能として完成していたであろう。触覚は、センサーは成立させていただろうが、まだ機能としては、働いていなかったであろう。
これが、急に外界に出ることになって、何がなんだかわからなくなってしまう。
それまで動けていたのに、全く何もできない。ベターと何かに引っ張られるかのように、身体が下に行こうとする。もし宇宙船で生まれて、１才になって地球に帰還したらどうなるであろうか。１才といえども、寝たきりになってしまうだろう。６倍もの地球のチカラは、想像以上にすごいものである。抵抗してもムダである。もうおっぱいを飲むこともイヤになるくらいに気持ちがワルイ。
この、下に引っ張られる気持ちワルさに慣れるのに、３日はかかってしまう。おっぱいだって飲めない。
おっぱいを飲まないのを心配して、お母さんはやっきになる。自分のおっぱいが、出ないのではないかと思いはじめる。確かに、自分のおっぱいも、３日間は出ないことが多いのだが。おかげで体重が、生まれた時よりも減ることになる。そのことを承知しているかのように、平気でいる。外界に慣れるだけで精一杯だから、体力をつけて生まれてくるのだろう。自分で育つようにできているのだ。
育つということは、このようなところからはじまる。

〇おっぱいを飲むことだけはできる

　生まれたばかりのヒトのあかちゃんは、何もできない。しかし、おっぱいを飲むことだけはできる。誰も教わることなしに、おっぱいを飲む。おっぱいを飲むことだけができると言っても、過言ではない。

おっぱいを飲むことは、機能として、身体に備えて生まれてくる。生まれた直後にでも、おっぱいが飲めるように、身体の構造も機能も完成させている。

生まれたばかりのあかちゃんの舌は、おっぱいを飲むためだけに機能する。食道や腸などが蠕動運動して食べ物を運んでいくが、あかちゃんの時期の舌は、蠕動運動する。あかちゃんの時期だけ蠕動運動する。それは大きくなって記憶に残ることはない。

舌が蠕動運動することによって、口の中のお母さんの乳房は、あかちゃんの口の奥に吸い寄せられ、舌が蠕動運動する際の口の奥で、口の中に、しかもお母さんの乳首の先端に、新しい空間をつくる。それは、乳首の先端で、お母さんの乳房と乳首が途切れる、その瞬間で、ほんの０・２秒程度の短い時間の出来事である。

お母さんの乳首は、あかちゃんのつくる、新しい空間の圧力に引き出されるように、乳汁を出す。お母さんが母乳を出すのではなく、あかちゃんがお母さんの乳房と乳首から、母乳を引き出す。それはあたかも噴水のように飛び出す。

あかあちゃんの上顎には、おかあさんの乳房と乳首が、口の中で固定されるように、窪みができている。

このような、絶妙なおっぱいを飲む動きは、幼児以降では忘れてしまう。

もちろん、お母さんは、あかちゃんのこのような能力を知ることはできない。自分のおっぱいを、どのようにあかちゃんが飲んでいるのかすら、わからない。不思議なことである。

すべて、あかちゃんは、自分で、生き残るためにやっていることである。お母さんがおっぱいを飲ませているのではない。もちろん手助けはしている。

〇しばらくはおっぱいを飲むことしかできない

まゆの３ヶ月では、まだおっぱいを飲むことしかできなかった。もちろん、保育園なので、哺乳びんとミルクがお母さんのおっぱいの代わりをした。

保育園に来るまでは、母乳だったそうで、よく保育園のミルクに慣れてくれたと思う。

あかちゃんの口は、おっぱいを飲むためにだけに存在している。私の口は、話すこともできるし呼吸することもできる。もちろん食べることも、水を飲むこともできる。しかし、あかちゃんの口は、おっぱいのためだけにある。

体重が６０００ｇを越えるまでは、口はおっぱいを飲むためだけにある。

まゆの口は、豹と同じである。何も変わらない。あかちゃん豹だけではなく、大人の豹も同じである。馬もブタも同じである。口は食べるためだけに存在する。

人間のあかちゃんの初期では、食べるためというより、おっぱいを飲むためだけに口が存在している。

人間のあかちゃんでは、口が最も早く成長し発達する。それは、簡単な理由で、生き残らなければならないから、食べることを優先しているだけであろう。完璧な機能として完成させているのは、おっぱいを飲むことだけである。まだごはんを食べることはできない。

どうして、おっぱい以外の食べ物が食べられないのであろうか。おっぱい以外の食べ物が、あかちゃんには良くないことが多いからだろう。おっぱいだけ飲んでおいて欲しいと、人間の遺伝子は考えたのだろう。

しばらくは、おっぱいを飲むことしかできないのではなくて、しばらくは、おっぱいしか飲めないようにしてある。

哺乳動物では、おっぱいを飲むことを、学習しているわけではない。食べ物をのみ込む時に意識しないでのみ込むのと同じように、おっぱいを飲んでいる。

形状的に、おっぱいのようではないモノが口に入ると、舌で押し出す。反射である。口周辺に何か触ると、それがおっぱいだと思って口を大きく開ける。これも反射である。おっぱい以外のものが、口に入るのを防いでいる。

○おっぱいとは何か

おっぱいしか飲めないのだから、すべての栄養源を、おっぱいが持っていることは確かである。人間には、大人で60兆個程度の細胞を持っている。すごい勢いで細胞分裂するのだ。たかだかと言ってはいけないが、お母さんの乳房から出て来る食品である。しかし栄養学でいう、すべての要素を、おっぱいは持っていることになる。

ただの食品ではない。

あかちゃんが、免疫機構を完備させられないことを承知して、乳汁に免疫物質を含ませている。腸管が細菌に犯されないように、配備させている。一般的に言われる、消化機能も完備させていないことを承知して、直接吸収されることを前提にしている。健康なおっぱいである限り、あかちゃんが、乳汁から健康を害するようなことはない。生き残ることに最も弱い時期である。最善が尽くされている。

健康でないおっぱいだけが問題である。健康でないおっぱいとは、微生物に侵されたおっぱいのことである。

おっぱいは血液だから、もし、お母さんの血液が微生物に侵されていたら、やっかいなことになる。そのまま、あかちゃんが、おっぱいを通じて、その微生物を受け取ってしまう。

そもそも、人は体温の高い生き物である。体温が高い生き物とは、体内の微生物を最小に止めようとする生き物である。免疫機構とは、自分の古い細胞を取り除くことと、体内に微生物を侵入させないことを、主たる役割としている。

免疫機構が完備していないあかちゃんに、お母さんのおっぱいから、微生物が侵入されてはたまらない。特別な地方に多い、やっかいな微生物の侵入もあったり、通常私達が腸管に抱えている微生物であったりする。

あかちゃんは、自分で育つが、おっぱいが完璧であることを前提に成り立っている。もし完璧でないおっぱいであれば、早く発見することが大切である。こういうことが、育ち応援なのだろう。

調乳ミルクは、現代では、おっぱいに含まれる免疫物質を除いて、ほぼ、おっぱいに近く調整できている。様々な理由で、お母さんから、直接おっぱ

いをもらえないあかちゃんもいる。まゆもその１人だった。まゆは、保育園で調乳ミルクで育った。何も起こらなかった。まゆが調乳ミルクであるために、健康を害したことなどない。調乳の水と温度に気をつけていた。
すべては微生物のことである。
調乳の水は沸騰させたものを使い、まゆが飲む時は40度になるように気をつけた。水が微生物に犯されることはもちろんだが、温度の低い調乳ミルクは、まゆの胃や腸の温度を下げる。

○おっぱいの本当の役割

　おっぱいの本当の役割は、別にある。
あかちゃんが、お母さんを見分けることができるのは、お母さんのおっぱいの匂いである。あかちゃんは、生後２日であっても、自分のお母さんのおっぱいの匂いと、自分のお母さんではないおっぱいの匂いを嗅ぎ分けられる。それが、生き残ることには欠かせないことは、理解できる。
あかちゃんにとっては、自分のお母さんを探すことは、生き残ることでは絶対条件である。人間のあかちゃんは、お母さんが無条件で守ってくれることを前提に、おっぱいを飲むこと以外、何もできないまま生まれるようになっている。あかちゃんが、自分で育つ時、特に生まれて間もなくは、お母さんがいなければ、自分で育つことができない。一身同体が前提になっている。
多分、あかちゃんの匂いを嗅ぐ能力は、生まれた時が最高だろう。
あかちゃんは、何もできなくても、自分で育つことができるように仕組まれている。お母さんが近くにいるかどうか判断できる。匂いによってである。
多分、人間のあかちゃんだけではなくて、豹や馬も同じだろう。もし、お母さんが近くにいなかったら、泣けばよい。お母さんを呼べばよい。お母さんは必ず、あかちゃんのことを第一に考えて、すぐに来てくれる。
そのうち、手で触ってお母さんが見分けられ、そして見た目で見分けられるようになる。見て判断することが確実である。見ることができるようになれば、もう不確かな匂いで、お母さんを探す必要などない。そして最小限度の、毒物の匂いなど、危険そうな匂いを判別できればよい。
ちなみに、お母さんは自分の子どもを判別できるのだろうか。

70％くらいのお母さんしか判別できない。判別の手段を持っていないのだ。
あかちゃんは、自分で育つように仕組まれている。その育つ段階段階で、確かなことがある。大人は、母親ですら、自分のあかちゃんを判別することが不確かなように、あかちゃんが育つことに、何も切り札を持っていない。
はっきり言って、大人はわからない。あかちゃんに任せるしかない。

〇おっぱいを飲む口がやっかい

　入園してしばらくして、まゆは、しきりに手を口に入れるようになった。寝たままだが、おもちゃも口に入れる。あたかも、それが何であるか確かめているかのようである。３から４ヶ月の頃である。
そして、大きな、掛けフトンにもなるようなタオルの端を、口に入れるようになった。ずっとそうしている。お母さんと一緒にいた時に、お母さんとまゆが、いつも一緒に掛けて、寝そべっていたタオルであるらしい。
まゆだけではなく、あかちゃんは、みんなタオルが好きである。保育園にはタオルもあるが、保育園のそれではない。お母さんのタオルは、あかちゃんにとって、特別のモノである。
よだれも多くなった。
唾液は、あかちゃんが、口の中に何でも入れたがるから、刺激で多く出てくるのであろうが、それだけではない。何もしなくても、あかちゃんの唾液は多く、よだれとなって、口から出てくる。
口に入れて、良いものと悪いものを判別できないあかちゃんにとって、ことさら多くの唾液が出てくることは、衛生的にもプラスになる。あかちゃんの時期には、唾液が多く出るように仕組まれている。
どうして、何でも口に入れたがるのか。何もなければ指になる。指しゃぶりである。
まゆは、それまで、ミルクしか飲めなかった。スプーンでミルクを与えることすらできなかった。口が、乳房乳首以外は受けつけなかった。それが、急に、指やタオルやおもちゃを、口に入れはじめる。
おっぱいを飲む専用にできている口を、改造している。しかも、自分で改造している。乳房乳首以外のモノは、舌で押し出していたのに、次第に受け入

れはじめる。ほっぺに触ったものは、乳房乳首と判断して追いかけていたのに、しらん顔になる。指やタオルを口に入れていて、次第に、口に入るものが、乳房乳首だけではないと思いはじめているかのようだ。
この、おっぱいを飲むだけの口を改造するのが、やっかいである。
もし、この時期に、口を改造しなければ、そのまま大きくなっても、口に入るものが、乳房乳首と判断してしまうことになる。つまり反射が消えない。
時々、お母さんに聞かれることがある。この子４ヶ月だから離乳食はじめたいんだけど〜食べさせても食べないんです。食べたそうなんだけど、口から出してしまうんです。何かおかしいんですか？わたしもうどうしていいかわからないんです。悲愴感漂っている。
このあかちゃんの口は、まだ、おっぱいを飲むことしかできない口のままであるだけで、ごくフツウの出来事である。ビックリするが、それだけのことである。あかちゃんが、自分で自分の口を改造するまで待てばよい。

○食べる話す呼吸するが口の役割になる

　体重６０００ｇを越えてくると、やっと、まゆが何かを話しはじめる。話すのではないが、口から声が出る。
それまでは、すべてのまゆの声は、鼻から聞こえていた。
そしてよくわからないが、まゆは、口でも呼吸できている。私の口の役割は、食べることと話すことと呼吸することだが、やっと、まゆも私と同じように、食べることと話すことと呼吸することができるようになった。
それまでのまゆのノドは、私のノドに較べて、上からギュっと、圧縮されているような構造になっていた。人間の大人が特殊なのであって、人間以外の哺乳動物は、すべて同じである。まゆも、哺乳動物らしかった。まゆの首は、少し長くなったように思える。
まゆたちは、危険を避けるために、口は食べるだけ、鼻は呼吸するだけになっていた。オッパイを飲みながら呼吸をしていた。呼吸は鼻でしているので、音を口から出すことは難しい。
ノドが広がって、音を口から出せるようになったのは良いことだが、ノドは、空気と食べ物が交差することになる。信号でもなければ、空気が食道に

入り、食べ物が気道から肺に入ってしまう。ノドぼとけが、信号の役割と、切替え作業をしている。
この切替え作業がはじまったことで、少々やっかいなことになる。
それまでは、他の哺乳動物と同じように、口でおっぱいを飲みながら、鼻で呼吸をしていた。おっぱいを飲むために、一時、呼吸を中止するようなことはなかった。おっぱいを飲みながら、呼吸ができていた。人間以外の哺乳動物では、みんな、食べながら呼吸ができる。しかし体重６０００ｇ以上の人間では、食べ物をのみ込む時は、一時的に呼吸を止めなくてはならない。
これは、けっこう驚くだろう。まゆもビックリしたと思う。すべてのあかちゃんは、この時期には、おっぱいを、続けて飲むことにとまどいを覚える。時々苦しくなって、どうにもならなくなることがある。乳房乳首を離してやるとなんでもなくなる。大人は、もちろんそんなことはよくわかっているから、とまどいはない。ごはんをのみ込む時は、意識しなくても呼吸は止まる。

○唇が食べ物を判断する

　生き残るためには、お母さんのおっぱいだけに頼っていてはまずい。お母さんのおっぱいを飲むことは、敵にスキを与える。できるだけ早く、自分で食べ物を捕ることを、学習しなければならない。
３ヶ月頃から、口の構造改革をして、何でも食べれる準備をすすめる。
おっぱいを飲む時に、口を大きく開けていた。唇は、大きな乳房から空気が漏れないように、栓の役割をしていただけである。しかし、栓では、おっぱい以外の食べ物を食べることには不適切である。
唇は、人の触覚の中では、最も敏感な部位である。唇で、熱さを感じなければ、高温のラーメンを口の中に入れてしまって、そして、ヤケドしてしまう。唇でどんな食べ物か判断しなければ、石さえ口に入れてしまう。
食べ物は、唇を通して食べる。唇は、それがどんな食べ物であるかの情報を、脳に送る。脳は、それに対応した処理の命令を出す。
まゆは、唇の使い方が上手だった。唇の使い方を早くに学習した。唇の使い方が上手かどうかは、おちょぼ口にある。早く口に入れてくれと、口をいっ

ぱいに開けるような態度を示すことはなかった。保育のスタッフも、ア～ンと、大きく口を開けることを、うながすこともなかった。
どうしてア～ンなのであろうか。おかしい。あまり唇の役割を、知ってもらってはいないからだろう。それとも、早く食べさせてしまいたいからだろうか。
まゆが、食べ物を欲しがる時は、目で合図した。手で合図した。ア～ンはしなかった。まだ手が使えないために、自分で食べることができないので、合図するしかない。
ボーロは、なんとか、自分で掴めるようになって、自分で口に持っていくが、ボーロが素直に口に入ってくれることは珍しい。スタッフに食べさせてもらうことが、１番うまくいく。
まゆは、唇に食べ物が当たると口を開けるようになった。
大きくなると、スプーン満杯のカレーを、大きく口を開けて、ガバっと口の中に、スコップで放り込むように入れるケースがある。大人でも時々見かける。大人では、目が、すでに、食べ物が何であるか判断している。よほどのことがない限り、おかしなことになることはない。おかしなことにはならないが、どのくらいの流動性を持っているのかなど、微妙な判断はできない。唇で判断すれば、もっとおいしく食べれるのに、と思う。

○何でも食べられるわけではない

　おちょぼ口で、唇から食べることができるようになったからといって、どんな食べ物もというわけにはいかない。何でも食べたがるからといって、食べさせてはいけないものもある。
目には見えないけれども、まゆの腸管が、大人のように完成されているわけでもない。
早くおっぱいから離れたいために、自分で食べたがる。大昔は、それでも、卵など食べなかっただろう。エビやカニやブタや牛などの肉を、食べることもなかったであろう。動物を食べても、内臓止まりだっただろう。肉は固くて、とてもあかちゃんには難しい。
牛乳だって飲む必要はなかった。飲みたければ、お母さんのおっぱいを飲め

ばいい。
大昔に較べて、現代では、大人の調理が発達して、どんな食べ物も豊富にある。あかちゃんの近くにある。肉だって柔らかくできる。
あかちゃんのお腹は、防御されるようにできていない。お母さんのおっぱいしか入ってこないことが前提になっている。母乳は、防御されていないあかちゃんのお腹を、代わって防御するように出来上がっている。調乳ミルクは好ましいが、あかちゃんのお腹を、代わって防御することはできない。しかし栄養的に、調乳ミルクが、母乳に劣ることはない。
確かに、体重６０００ｇを越えると、大人の口に近づいて、食べて話して呼吸できるようになる。乳房乳首だけしか受けつけなかった口が、どんなものでも受けつけるようにはなる。しかし、お腹の中は、まだ何でも受けつけるようにはなっていない。ずっと昔に、あかちゃんが食べられるものが、限定されたと考えた方が、わかりやすい。つまり消化が難しい。タンパクは消化が難しい。
何かを食べると、急に身体に異変を起こさせる食べ物がある。様々なタンパクである。りんごとても、身体に異変を起こさせることがある。
まゆも、早くミルク以外の食べ物を食べたがった。食べられるから食べてよいものではない。あかちゃんの身体は、大昔のままであるが、食べ物は、ここ50年くらいで、種類を増やしてしまった。大人の嗜好が進むのは楽しいことであるが、一方で、あかちゃんにとっては、危険度を増すことになっている。
まゆは、幸いにして、身体に異変が起きるようなことがなかった。たとえば、ごはんの極端に柔らかいものだけを、しばらく食べる。配慮した結果であろうと思う。
大人の食事が、シンプルとは言えなくなってきている以上、あかちゃんの食べ物の危険性は、これからも高まるだろう。進化はそんなに速くできない。
保育園でも、アレルギーの子どもが必ずいる。まゆは、何の心配もしなかった。卵と牛乳がダメですか？入園の時に必ず聞く。遠ざける以外に方法がない。新たに保育園で発生させないことしか、対処できない。異変を新たに発生させないことでは、タンパクは白身の魚、つまり深海の魚しか食べないことや、床暖房にして、保育園を暖かくして、子ども達の体温が下がらないよ

うにすることだった。

〇呼吸のこと

　まゆが６ヶ月の頃、首がすわって、背もたれのあるイスに座ることができるようになる。まゆは、時々ミルクを飲んでいる時に、ムセるようになった。ことばが出てきて、呼吸が口でもできるようになって、気道と食道の切り替えを行うようになったからである。ミルクもだが、水は長くつながった食べ物である。食道へミルクが入っているうちに気道が開いてしまう。少しの期間なので気にはならないが、スタッフは驚く。
圧縮されていたノドが下に伸びて、口から入った空気も、気道へ送り込むことができるようになる。できることと、やってはいけないことは異なる。
鼻腔には鼻毛があって、しかも細く曲がりくねっていて、しめっぽい。肺は、水浸しの中にある器官である。鼻毛で、細菌ウイルスやゴミなどの侵入を抑え、曲がりくねった鼻腔で空気を温めて、湿気を持たせて肺に送り込む。理にかなっている。しかも、鼻水には免疫物質が備わっていて、細菌やウイルスと対抗している。
口から空気が入ったらどうなるであろうか。
ゴミも細菌ウイルスも、そのまま通る。空気は、冷たいまま、しかも乾燥状態で肺に入る。
どう考えても、口で呼吸していれば、病気になるだろうと思う。これはおかしい。進化とは、理にかなうものだ。しかし、口で呼吸できることは、理屈が通らない。
大昔から、体重６０００ｇを越えた人間は、口でも呼吸ができていたはずである。ことばがあったから。
大きく異なっていることは、空気がキレイではなくなっていることだろう。
もし、空気がキレイであることがあたりまえであったならば、確かに、空気の冷たさや乾燥への配慮は口ではできないが、細菌やウイルスやゴミの侵入といったことについては、ほとんど配慮する必要がなかったであろう。鼻でも口でも、どっちで呼吸してもいいではないか。両方呼吸ができれば、他の哺乳動物より有利だ。後々の環境悪化によって、キレイでない空気が通常に

なってしまうことなど、想定の範囲ではなかったのかもしれない。
現代のような、キレイでない空気を肺に送り込まなければならない事態は、口で呼吸できることが、危機的ですらある。
特に、都会で暮すあかちゃんだけではなく、大人も、カゼに怯え、花粉症に怯える。
この危機的状況は、今後解決することは望み薄である。
残るは、口でも呼吸ができるけれど、呼吸は鼻でする、という習慣をつけることだろう。

○口を閉じる習慣

まゆの口は、いつも閉じられていた。必死になって寝返りをしている時も、口は閉じられていた。口が閉じられていると、当然のように鼻で呼吸する。
口を閉じることは習慣である。
体重６０００ｇまでは、口で呼吸ができないが、それでも、口が閉じられていないあかちゃんもいる。最初に、口が閉じる習慣が崩れる可能性があるのは、３ヶ月頃の、何でも口に持っていく時である。指しゃぶりをはじめると、口が開いてしまう。呼吸は、鼻でしているのだが、指しゃぶりをしている間は口が開いている。次に可能性があるのは、離乳食をはじめる頃である。スプーンで、お母さんから食べさせてもらうのだが、ア〜ンと大きく口を開ける。ア〜ンなど必要ないのに、おかしな習慣である。
次の可能性は、歯が生えはじめて、何でもかじってしまう、８ヶ月ごろである。なにかをかじっていると口が開いている。
それでも、12ヶ月くらいまでは、普段から、口を閉じているあかちゃんが、ほとんどである。一見、あかちゃんは、口がポカンと開いているようだが、そうでもない。しかし、24ヶ月までには、口が閉じられないあかちゃんが増え、36ヶ月までには、もっと増える。年令が増すほどに、口を閉じられない子どもが増える。口が閉じられないのではなくて、口を開けて生活する習慣がつくことである。
大人を調べたことはないが、多分、あかちゃんよりも、もっと多いであろ

う。
江戸時代の人は、どうだったのだろうか。徳川の殿様は、どうだったのだろうか。昔から、口が開いてるわよ？と母親に注意される風潮があった。最近では、お母さんが注意しているのを、見かけたことがない。
口を閉じて生活することは、習慣だから、注意すれば治すことができる。
私は、ガムを毎日使用している。電車の中などでは、常に使っている。自分ではっきりわかるが、私は口を閉じて生活しているし、呼吸は鼻で行っている。ガムを噛んでいる時は、口が閉じている。それは間違いない。しかも、鼻で呼吸していることを自覚している。
以前に、朝弱く辛い時期が、かなりながい期間あった。多分、口で呼吸して眠っていたのではないかと想像する。口を閉じて鼻で呼吸をすることを自覚して、ガムを噛みはじめて、治ったのではないかと思う。以前の事はよくわからないが。
まゆは完璧であった。保育園では、ミルクを水分補給の代わりに使っていた。初期の離乳食をはじめても、ミルクを飲んだ。哺乳を、ずっとながく行っていると、口を閉じて生活するあかちゃんが多いことは、わかっていた。
この水分補給の代わりに、離乳食後にミルクを飲むことは、非常に良いことだったのではないかと、今でも思う。スタッフの誰かが、言っていたような気がする。
現代では、多くの子ども達や大人が、口をポカンと開けて生活している。口で呼吸している子ども達や、大人も多い。口で呼吸をしてはいけないことが、わかってもらえたら、口を開けて生活してはまずい、こともわかってほしいものだ。

〇匂うことで危険を察知している

　確かに、生き残るために、あかちゃんは、口から重点的に発育する。
しかし、生き残ることでは、食べることだけでは事足りない。危険を回避しなければならないのだ。生まれた直後が、最も危ない。鳥に連れ去られるか、狼に喰われるか、とにかく危険である。おっぱいが、教えられなくても

飲めるように、何らかの危険回避のプログラムが、組み込まれているはずである。
実際に、生後２日のあかちゃんが、匂いを感じとれるか、匂いの持つ快適さを、感じるかどうか、計測したことがある。もちろん、保育園では、出生後２日目のあかちゃんはいない。産院で産まれたあかちゃんと、お母さんに協力していただいた。
計測結果を見るまでもなく、観察で確認できた。生後２日目のあかちゃんが、最も反応して、おっぱいを欲しがる口をしたのは、自分のお母さんの母乳を染み込ませたガーゼを匂った時である。その後に行った計測でも、自分のお母さんではない母親の母乳を染み込ませたガーゼの反応とは、明らかに異なっていた。
そして、オレンジの匂いに、母乳の匂いと同じくらいの、快適な反応があった。これは観察では見えない。脳波の計測によってわかったものだ。水道水には嫌悪な反応を示した。水として、ブランクのつもりで、匂ってもらったのだが、予想外だった。
もう明らかだった。あかちゃんには、匂うことで、身の危険を察知するチカラが、備わっている。
音を聴くことは、すでに以前から理解されていた。しかし、音を聞き分けるだけでは、危険を回避することができない。しのび寄る狼を、見極めることができない。あかちゃんは、母親が飼っているネコであっても、近寄ると、眉間に恐怖のシワをつくる。危険を察知している。
オレンジの匂いで、あかちゃんが、快適さを感じたことは、私にとっては救いでもあった。もう保育園の園長を退いていた。もっと子ども達にやってあげられることがあった。庭を芝生にして、果樹園のように、実のなる木を、いくつも植えた。オレンジはなかったが、正解だった。柑橘系の匂いに快適さを示すのは、あかちゃんばかりではない。大人の化粧品でもたくさん使われる。
水道水に嫌悪感を感じたことは、考えてみれば当然のことだろう。塩素臭が身近になったのは、近年の事である。しかも毒である。毒をもって、病原性微生物を殺傷しているが、あかちゃんにとっては、比較する天秤の問題でもないだろう。

沐浴のことがとやかく言われる。あかちゃんの沐浴を避けるのだ。母親が、自分のあかちゃんの匂いを、忘れてしまうからという理由である。それ以前に、生まれたばかりのあかちゃんと水道水は、ミスマッチである。沐浴温度が高いからイヤがるだけではない。水道水がイヤなのだ。
考えてみれば、生まれてきて、思ったより動けないことに、重力に、とまどうこともあるが、このどうにもならない、匂いが充満する世界は、何であろうか。木々の匂いも、果樹の匂いも何もない。不快感きわまりない。大昔は、鳥や狼に注意した。現代では、どうにも理解に苦しむ匂いに、ガマンがならない。そう感じているだろう。

○音を聞くことでも危険を察知する

　匂いを嗅ぎわけることができるだけでは、危険を回避することは難しい。近寄ってくる危険な物音にも、あかちゃんは敏感である。生まれてきて、狼のうなる声など、低い声に注意しているのだろう。鼻から音が出る音に注意である。保育園は、イヌやネコの侵入に注意をしている。保育園ができたての頃、垣根がまだ揃っていなかった。夜、イヌやネコが保育園の庭に侵入して、砂場などに、糞を残すことが度々あった。昼でも、時々イヌが侵入した。大騒ぎになる。
あかちゃんにとっては、イヌも狼も変わらない。
お母さんの声以外は、すべてが自分に危険を与える音だと感じるのだろう。
特に、イヌやネコの鼻から出す、うなるような音には、すくんでしまう。
あかちゃんが、胎児の時から音を聞き分けるかどうかについては、実験の報告がなされている。胎生７ヶ月ごろから、聞こえているようである。聞こえていなければ、生まれてからの生き残ることに、影響を及ぼす。
お母さんのお腹にいる時から、お母さんの声は聞き慣れている。イントネーションすらわかっている。どういうわけだか、お母さんは、あかちゃんに話しかける時に、声の抑揚を大きくする。語尾が上がることが多い。普段の会話とは、異なった抑揚となる。
実際に、お母さんがあかちゃんを呼ぶ時は、……ちゃん、大きな抑揚で呼ぶ。お父さんを呼ぶ時とは、ゼンゼン違う。保育のスタッフが、子ども達を

呼ぶ時も同じである。園長である私を呼ぶ時に、同じような呼び方をされたら気持ちワルイ。
産院で時々、生まれたばかりのあかちゃんとお母さんを、観察する機会もあった。独特のイントネーションは、お母さんの学習の結果ではないかと思う。あかちゃんの反応からの学習であろう。フツウの大人同士の会話では、あかちゃんは、見向きもしない。お母さんが、あかちゃんと話す、独特の抑揚のある話し方に、反応する。
多分、あかちゃんは、お母さんの声を特定できるだろう。ずっとお腹の中で聞いてきて、記憶しなければ、生き残れない声である。しかも、雑多な無関係の音から、安全な声を聞き分けなければならない。
保育のスタッフも、学習するのだろう。子ども達と話す時は、常に大きな抑揚をつけて話す。時々、もっと抑揚をつけてあかちゃんと話してくれればいいのに、と思うお母さんや保育のスタッフもいた。
大人の世界でも、同じことが言える場合がある。
新入社員に話しをする時、フツウの会話の抑揚では、みんな無反応である。大きな抑揚で、あかちゃんに話すようにすると、話しの内容にもよるが、反応が良い。これは、人間のコミュニケーションのすべてにあてはまる。人事の担当者で、お母さんのように、新入社員に接する人がいたりする。それだけで、話し方の抑揚が大きいだけで、彼等は、親近感を抱く。上司と部下も同じだろう。テレビのキャスターも同じだろう。
ここ80年くらいだろうか、洗濯機が動きはじめると異様な音がする。冷蔵庫もそうである。電子レンジが回りはじめても音がする。テレビからは、常にわけのわからない音がしている。
あかちゃんにとって、とんでもない状況ができてしまったのではないだろうか。たかだか、80年くらいである。飛行機の爆音も、自動車のエンジン音もなかったのに。
特に、生き残るために、音を聞く敏感さを維持してきたあかちゃんにとって、とてつもない大きなストレスになっていることは、想像にかたくない。

〇危険を知らせるために泣く

　あかちゃんは、どうしてあんなにすごい声で泣くのだろうか。
すごい声ではなくて、あかちゃんの泣き声はゆらがないのだ。飛行機の爆音と同じである。ライオンがうなっている声を、テレビで見ることがある。私には不快になる。多分、ゆらいではいないだろう。
ライオンと同じように、鼻から音が出るあかちゃんの泣き声は、どうにもならない。
しかし、もし、あかちゃんの泣き声が、こうも大人に不快でなければ、危険を知らせる意味がない。ちょっと待ってね〜などと言えないようにしなければならないのだ。
自然が出す音でゆらがないものはない。心臓の音でも、沢の音でも、風の音でも、波の音でも、池に石を落とした音でも、すべてである。音が次第に弱まって消えていく。音は波だから、波が小さくなっていく。
飛行機でも自動車でも電機洗濯機でも冷蔵庫でも、人工のモノが出す音には、ゆらぎがない。ヒトにとって不快なのである。
その人工の音と同じ音で、あかちゃんは泣く。
あかちゃんの泣き声が不快だから、耳を塞ぐか、タイヘン〜とすぐに跳んで行くか、愛のボタンの動き方だろう。あかちゃんに落ち度はない。わざわざそうしているのだ。
生まれてみて、とんでもないことに気がつく。
常に、不快な音に悩まされる。身体にしまってある、野獣の声とも違う。なんだか、わけがわからない、不快な音である。心地よいお母さんの声さえも、かき消されてしまう。
冷蔵庫という便利な道具であるらしい。テレビというものだってあるし、洗濯機もある。エアコンもある。１日中音を出している。
もし、お母さんが、ゆらがない不快な音に慣れてしまって、あかちゃんの発する、不快な泣き声を、不快と感じなくなったら、タイヘンである。危険を知らせているのに、無視されてしまう。仕方がないから、もっと泣き声を大きくしないといけない。
泣かないように、おしおきをされることもある。次第に、なすすべを失ってしまう。狼が近づいても、じっとすくんでしまうしかない状況に追い込まれるあかちゃんもいる。

まゆが泣き出すと、スタッフは、私を呼びに来ることが多かった。どうにもならないのだ。私が、おいで〜と声をかけると泣き止む。なにかの理由で不安だったものが、私が呼びかけることで、不安がなくなる。それでも泣いていたら、おしっこかお腹が空いたかのどちらかだ。とにかく、泣くことはあかちゃんなりの危険を知らせている。

〇夜泣き

　まゆのお母さんが言っていたことがある。まゆは保育園に行っているせいか、夜泣きが少ないです。

一様に、あかちゃんは夜泣きをする。あたりまえだが、おっぱいが欲しいのに、何もしてくれないから泣く。当然の事である。ところが、お母さんは夜は眠る。あかちゃんとお母さんの生活パターンが、ズレている。

今でも、夜行性の猿がいる。ライオンに較べれば弱いから、できるだけ、昼間動くのは避けたいだろう。その後、仲間と一緒に戦えるようになって、少しは強くなって、昼間でも動けるようになったと考えられる。夜はよく見えない。昼間動く方が、生き残ることでは有利である。

あかちゃんは夜行性ではないかと思うと、納得できるところがある。ほんのしばらくだが、あかちゃんにとっては、夜の方が安全である。

お母さんとあかちゃんは、行動パターンが、しばらくは大きくズレている。

睡眠は、頭脳の休息と考えられる。頭脳は、筋肉の調整のために進化したと考えられるので、筋肉が少なければ、睡眠も少ないだろう。筋肉が疲れなければ、睡眠も必要ないことになる。あかちゃんは、しばらくは、筋肉を使うことが少ないので、睡眠が少ない。

大人は、身体の中に時計を持っている。体内時計である。お昼になったら、時計を見なくてもわかる。お腹が空くのである。腹時計である。どうやら体内時計は３つあるらしい。もちろん、細胞の核の遺伝子である。すべての細胞の遺伝子に体内時計があるのではなく、頭脳と腸管と皮膚らしい。

どうして体内に時計などあるのだろうか。体内に時計がある方が、地球で生き残りやすかったと考えるのが自然である。多分、集団生活と関係があるだろう。一緒に狩りに出かけるのに、時計があれば有利である。もし体内時計

がなかったならば、学校や会社は成立しない。集団生活が成立しない。
体内時計の中心になっているのは、もちろん頭脳の体内時計である。そして、体内時計は日の光でスイッチが入る。体内時計は１日が単位である。
地球の裏側に旅行に出かけることもある。辛いけれども、慣れてしまう。体内時計が、クリアされて修正されていることに気がつく。地球の裏側でも、やっぱり、朝目で覚める。しかし、あかちゃんには何の関係もない。
あかちゃんが、自分で、体内時計を発育させる様子がわかっていない。あたかも、しばらくは、体内時計のスイッチが入らないようにできているかのようである。
まゆの夜泣きが少ないのは、保育園では、運動することが多いからだろう。筋肉が使われて睡眠したくなる。そして、保育園に行かなければならないために、朝必ず起きて、日の光を浴びるようになった。この２つのことで、まゆの体内時計の単位が、学習されたと想像できる。
朝は、カーテンを開けて、たとえ眠っていても、日の光を浴びることが、あかちゃんが体内時計を発育させることを、手助けすることになるのだろう。

○湿度が**30**％台になるとカゼでお休みが多い

　保育園で、私は、常に湿度計を見ていた。
湿度が30％台になると、カゼで休む子どもが多いからだ。これはどうにもならない。考えてみると、湿度が低いと、ウイルスには好条件となるし、鼻や口は乾燥してしまう。子どもの免疫力も弱い。みんな一緒に暮している。効いてしまう。
加湿器を動かしても、広い保育園ではどうにもならない。家に帰っても同じことだろう。寝ていても同じである。誰も、別段、おかしかったわけではないが、翌朝はダメだと思った。予想は必ず的中した。冬場は、湿度が低い日が多い。
私は、ここ数年、カゼで寝込んだことがない。数年というより、10年くらいだろう。記憶がない。保育園の園長時代の、睡眠時間３時間の、ギリギリの生活をしていた時から較べると、格段に良くなった。疲労もあるが、何よりも、唾液と鼻水の効用を、信じてからのように思える。手洗いを、こまめに

はじめたことも大きいだろう。身体にウイルスを入れてしまったら、メンドーになる。白血球のお世話にならなければならない。身体に侵入したウイルスを、退治してもらわないといけない。
しかし、白血球には、他にやることも多い。
子ども達の身体は、毎日成長し大きくなっている。それもあるが、子ども達といえども、毎日、多くの細胞がダメになっている。それは紫外線であったり、重力であったり、酸素であったり、環境に侵されることである。それだけではない。細菌ウイルスは常に身体に侵入しようとする。
人が、もし滅ぶとすると、滅ぼすことができるのは、細菌ウイルスだろうと考えている人も多くいるし、私もそうではないかと感じている。人は、目に見えないことは苦手だ。狼は危険だからと、絶滅に追い込むことができても、多分、もっと危険度の高い細菌ウイルスに対しては、打つ手がない。研究も遅れている。
カゼですら、決定打がない。
白血球の、大事な仕事は、自分の細胞のダメ細胞と新しい細胞を入れ換える仕事の、ダメ細胞の検索と、消去の仕事である。もし、この仕事を、白血球がうまくやってくれなければ、ダメ細胞は残ったまま、おかしな病気になってしまう。
白血球は忙しいから、できるだけ、鼻水や唾液のところで、細菌やウイルスをくい止めたい。私自身は、作戦として、そう思って毎日生活している。だから、カゼで寝込んだことがないのだと信じている。もっと早くわかれば良かった。
園長時代の体力の低下は、結果的には、何が身体を侵すかを知ることとなったが、子ども達にやってあげたかった。私にできたことは、せいぜい、加湿器のスイッチを押すことと、手洗いを、ウルサク言うことくらいのことだった。
今はよくわかるのに、残念である。

○熱が出る

　カゼをひくと発熱する。体温計は、保育園の必需品である。

熱があってグッタリしていると、保育園では何もできない。特に、他の子どもに感染してはと、気づかう。仕方がないことだが、お母さんに電話することになる。これがけっこうトラブルになったりする。連れて帰ったんだけど〜元気そうだから連れて行きます。
近所の子どもだったらよいのだが、お母さんが遠くに勤めていたりすると、タイヘンなのだ。
発熱は、身体に異変があるために、身体の免疫が働きはじめたことだが、これがあまり知られていない。せっかく体温を上げて、免疫システムに指令を出したのだが、ガンガン下げてしまうことがある。発熱したら冷やさないといけない。これは習慣のように、大人にくっついている。確かに、高熱になったのでは、身体自身がおかしくなる。だからといってガンガンに冷やせば、発熱の原因になった、たとえばウイルスの侵入などを、放置することになってしまう。少しの発熱のまま、横になって眠ることが最適である。保育園の事務所の端っこに、専用のベッドを置いてあった。熱があっても、眠ってしまえば、そのまま平気であることも多かった。
体温が高いことは、免疫システムが動きはじめた証しである。したがって、身体に、何らかの異変があったことは間違いない。足の傷が治ってなくて、そこから細菌が侵入したのではないかと予測する。ウイルスをもらってしまったと想像する。
まゆが、事務所のベッドに寝た記憶がない。だいたい決まっている。男の子に多いのも、うわさとおりである。男の子は弱い。すぐ発熱する。
でも、すぐ発熱することは、免疫システムが素早く働いていることで、素晴らしいことでもある。
健康とは、今日も昨日の自分と同じ自分であることだと思う。成人した大人の健康である。大人は、毎日衰える。衰えるけれども、衰えを最少に止めることが健康である。
子どもの場合は、毎日成長する。細胞が増えていく。一方で、出来上がった細胞は衰えていく。
発熱ということは、足の傷から侵入した細菌の影響かもしれないが、自らの細胞に攻撃を仕掛けて、悪い細胞を取り除いている場合もある。
あまりの高熱や、熱の継続状態は、明らかに異状ではあるが、ちょっとした

発熱は、身体に、プラスをもたらしていることもある。
いつも、お母さんとスタッフの間に入って手を焼いた。

〇体温が低いとまずい

　まゆの体温は常に安定していた。保育園に来た時から安定していた。人間の身体は、常に３６・５度近辺の体温になるようにできている。環境温度に較べて高い。しかも恒常である。理由がある。
細胞の主役は、遺伝子を、ゲノムとして持っている核とミトコンドリアである。その細胞が、60兆個程度集まって、身体が出来上がっている。
ミトコンドリアは、微生物と考えられる。しかも好気性である。人間の細胞の中で生きている。生きているし、好気性だから酸素が欠かせない。血液循環のシステムを完備させたのも、身体の隅々まで、血液を通じて酸素を送り込んでもらうためである。したがって、血液循環がダメになると、ミトコンドリアは生きられなくなって、身体の細胞もダメになって、人間は生きられない。
なぜミトコンドリアを、細胞の中に取り込んだのであろうか。
ミトコンドリアは呼吸する。呼吸することで熱を出す。走ると熱が出るのは、細胞中の、ミトコンドリアの呼吸が多くなるからである。私達の息が上がっているのではなく、ミトコンドリアの息が上がっているのだ。もし、ミトコンドリアが少なくなったら、私達のパワーも落ちることになる。ミトコンドリアが好調であれば、私達のパワーも大きくなる。
ミトコンドリアは、環境の変化に弱い。気圧の変化にも弱く、紫外線にも弱く熱さ寒さにも弱い。微生物が細胞に侵入しても困る。せっかくの酸素を横取りされてしまう。ミトコンドリアは弱ってしまうようにできている。
ミトコンドリアを鍛えることができる。サッカーやマラソンの選手の安静時の心拍数は、50を切るくらいに少ない。フツウの人は70であったり１００であったりする。つまり、ミトコンドリアの能力が高いと、少ない血液循環でも、足りることになる。少ない酸素でも生きていける。一般的に、このことを、運動能力が高いと言う。パワーがあるのだ。高い山に行くと高山病になる。ミトコンドリアが犯されてしまう。ミトコンドリアが少なくなって体

温が下がって、ますます呼吸が荒くなる。悪循環に陥る。しかし、もし生き延びれば、次に高い山に登った時には、鍛えられたミトコンドリアになっている。
体温が故意に低くなった時、高山と同じように、ミトコンドリアにとって、まずいことが起こる。腸内の微生物が身体に侵入する。もともと体温の低い生き物では、腸内の微生物は身体の中を行き来していた。私達が体温を高く維持しているのは、勝手に腸内の微生物が、身体に侵入しては困るからである。
ミトコンドリアは微生物である。勝手に細胞中に侵入されて、酸素を横取られたら困る。
あかちゃんには、ミトコンドリアが多い細胞がある。ミトコンドリアは、呼吸熱を発するので、エネルギーを消費する。ミトコンドリアが多いと、褐色に見えるので、褐色脂肪細胞と言う。エネルギーを貯える白色脂肪細胞というのもある。消費する褐色脂肪細胞もあるから、コンビになっている。
あかちゃんの時に、褐色脂肪細胞が多いのは、生き残るためだと考えられる。動かないので、体温が下がるのを防いでいる。湯たんぽのようになっている。冬眠をするクマなども、同じように、褐色脂肪細胞が多い。
まゆの健康を維持しようと思ったら、故意に体温を下げないことが大事であった。床暖房が良かったのだと思う。みんな疲れると、床にはいつくばって寝ていた。

〇手が動きはじめる

　まゆの手は、いまだに脳裏に焼きついている。なかなか拓いてくれない手を、一生懸命に拓いて、私の顔を触ろうとする。なかなか拓かない親指のまま、４本の指が近づいてくる。
指を差し出すと、ずっと握っている。
生まれる時に、丸くして、産道を通る危険を回避しているのだそうで、おかげで、手も、なかなか拓かない。最初はグーとはよく言ったものだ。最初はグーしかできなかった。手だけではない。肘も膝もみんな丸まっている。安心してグッと眠っている以外は、身体にチカラが入っている。

手は、食べ物を口に運ぶためにあるのだろう。何かをつかんで、口に運びやすいようにできている。肩から動かすと、かなり遠くまで手を伸ばすことができる。肘はたたんで、手が口に入るように調整できる。手は、食べ物を口に運ぶためだけに、機能するようにできているため、口が、おっぱいを飲む口から解放されて、おっぱい以外の食べ物を食べられるようになるまで、ほとんど発達らしきことがない。せいぜい、私の顔を触るか、タオルを触るか、そんなものである。それも握ることしかできない。

よくできているとは思う。おっぱいしか飲めないのに、ボーロをつかめたってどうにもならない。まだボーロは食べないようにと、発達を抑えているとしか思えない。もしこれが同時にできていたら、タイヘンなことだっただろう。手はボーロを口に運ぶのに、口はボーロを拒否する事態になる。ストレスこの上ない。

同じようなことが、お母さんとあかちゃんのことでは起きる。口はまだおっぱいしか飲めないのに、お母さんが、スプーンで離乳食を食べさせようとするのである。４ヶ月になったら離乳食をはじめましょうと、どこかの本に書いてあったそうである。この子〜おかしいのかしらと疑う。

難しいことだが、やっぱり、あかちゃんのことを学ぶしか、方法はない。親も子も、ストレスになる。それよりも、あかちゃんを信じればよいではないか。スプーンを押し出せば、まだ離乳食は食べないんだと思えばよい。あかちゃんは自分で育つ。

まゆだけではなく、あかちゃんは、みんなボールがスキだ。ボールを向こうに放れるようになると、とにかくうれしい。あかちゃんには直線の概念がない。直線の概念が理解できるのは、かなり後のように思う。直線は、人工のものである。自然にはない。したがって、あかちゃんには、直線を学習するまで、直線を理解できない。ボールがスキなのも、理由がある。ボールだけではない。丸まっこいものは、何でもスキである。

次第に肩や肘が固まっていたのが解けてくると、両手で何かをしようとする。

両方の手が同時に動いて、何かをすることは、生まれ持った能力ではない。

○ハイハイ

まゆはハイハイが上手だった。

どこまでも、保育園の庭までも、ハイハイして出て行った。いなくなっては、探し回ることが多かった。

寝返りがはじめてできるようになった時も、おもしろいことがあった。

必死になって寝返ろうとするのだが、自分の腕がジャマになって、寝返ることができない。

これも大昔、平らな所で暮すことが少なかったのであろう。坂を転げ出すと、どこまでも転がってしまう。そして、危険にさらされることが頻繁だったと思われる。腕が反射的に寝返りを妨げるのは、その転がることを、防いだためだろう。現在のあかちゃんは、みな平らな所で暮すことになっている。それは、日本のように裕福な、環境の良い所だけではなくて、世界のどこでも、あかちゃんは平らなところで暮している。しかし、大昔に身に着いたものは消えることがない。

まゆは、寝ている時も、誰かが、そばにいることを好んだ。それはまゆだけではなくて、保育園の園児全員が同じように、そばに誰かがいることを好んだ。そばにいることが人ではなくても、象のぬいぐるみでもよかった。少なくとも、転がることはないと判断しているかのようだった。両側にぬいぐるみがあれば、もっと安心だった。

おかしなもので、平らなところで転がる不安なく暮らせるようになって、まだ千年くらいなものかもしれない。それまでの、何万年あるいは何十万年というもの、転がる不安に悩まされたであろう。

まゆがハイハイが上手であることは、幸いだった。年上の保育園児をお手本にして、しきりにハイハイの練習をした。

子どもは、フツウは、お手本とハイハイするスペースがあれば、誰でもがハイハイする。ハイハイして身体を移動させたいからである。

ハイハイは、４足歩行の生き物と同じ行為である。４足歩行の生き物の有利なところは、頭と心臓が、地球に水平に位置することである。血液は、ほぼ地球に平行に循環することになる。ヒトだけが２足歩行で立ち上がるが、立ち上がると血液は縦に、地球に垂直に循環することになる。重力に逆らうこ

とになる。海や河の生き物は、すべて地球に平行に暮している。しかも水の中であるために、重力が１／６ですむ。血圧の変化が少なく、圧力も小さくてすむ。
あかちゃんが生まれた時、身体は、地球に引き込まれるかのように、身動きとれなくなるが、やっとハイハイできるようになる。近年、ハイハイしない子どももも、多くなっている。実際に、私の園長時代にも、１名いた。ハイハイしないまま立ち上がったらしい。はじめて保育園に来た時には、すでに立ち上がっていた。ハイハイも学習で、お母さんや保育スタッフが、実際にハイハイを見せてあげないとできない。
血液を地球に平行して回していたものを、いきなり縦に回さない方が、無難である。ハイハイは、どうしても、あかちゃんが経過しなければならない行為である。

〇歯が生えてくる
　まゆの歯は、８ヶ月で前の下の２本が同時に生えてきた。すでに、おかゆであったり、フツウのごはんだったりしていた。ミルクも飲んだが、水分代わりであった。コップでも飲めたが、哺乳びんで飲むことも好きだった。柔らかいビスケットも食べていた。
スタッフは、みんなのほっぺが、ブツブツになることを、いつも気にしていた。食べ物が豊富なんだと思う。ミルクを飲んでいれば安全である。しかし、昼食メニューにこだわらなければ、お母さんに注文をつけられる。豪華にしなければならない。８ヶ月では、まだシンプルで良いのだが。ミルクさえ飲んでいれば。
どうして歯は自動的に生えてくるのだろう。プログラムされていることは確かである。下の前歯２本から生えてくるが、どうしてだろう。余計なことを考えてみると、８ヶ月くらいまでは、おっぱいさえ飲んでいれば、栄養的には何ら問題はないのだろう。そう決まっていると考えることが妥当だ。現に、１才過ぎても、おっぱいだけで暮しているあかちゃんもいる。歯が生えるということは、おっぱい以外の食べ物も、食べるという証であろう。５ヶ月頃に、口はおっぱいだけのものではなくて、おっぱい以外の食べ物も、受

け入れるように変化する。８ヶ月になって、歯が生えるのは、どういう理由だろう。腸管の発育とも連係しているのであろうが、まだよくわかっていない。もしかして、歯が生えるということは、消化のチカラと連動していて、おっぱい以外の食べ物を、安心して食べることができるサインであるのかもしれない。よくわからない。
歯が生えると、食べ物のテクスチャーのセンサーができはじめる。歯と歯茎をつないでいる歯根膜である。歯は歯であり、食べ物を細かくグチャグチャにする。しかし、どの程度のチカラで噛めばよいかは、頭脳からの指令がなければ、歯は何もわからない。歯根膜がなければ、噛む程度を判断することができない。高齢になって、義歯になると、うまく咀嚼することができなくなる。歯根膜が失われているからである。
歯が生えはじめると、まゆは、何でもかじりはじめる。保育園のみんながスキだったのは、スリッパである。保育園のスリッパは、常に歯こぼれ状態だった。お母さんには不評だった。汚い。でもガンバッてそのままにした。確かに、お母さんが履いていたスリッパをかじるのだから、汚い。
私が園長を退いて、保育園では、スリッパは使わなくなったようである。どこの保育園でも、スリッパは使っていないように思える。
子ども達から、次第に、自ら育つための道具が消えていく。歯根膜を鍛えていたに違いなのだが。

○たっちする

　まゆがたっちしたのは、９ヶ月の時だった。
自分のロッカーに触りたくてたっちした。ロッカーが上にあるから、仕方なく立ち上がらなければならなかったのだろう。みんな一様に、上のものに触りたがって、立ち上がる。立ち上がって、スタッフが歓声を上げているのを、不思議そうにながめている。ただ上のロッカーから、おかしを出したかったのに。
みんな、手が少し自在にならないと、たっちしない。
座って、周りの物だけで遊んでいてもつまらなくなって、上のものを狙う。たっちするかどうかは、手が上のものに触りたがるかどうかだ。理解でき

た。
同じ目線の、おもしろいものを狙うのだったら、ハイハイが適当である。豹のようなスピードで、ハイハイする子がいた。着物の膝がすぐに破れて、お母さんは、その度にミシンをかける。すごく頼もしい。しばらくすると、膝をつかないで、ハイハイするようになる。これでも速い。高這いができるようになると、たっちも近い。そして、自分の目線だけのものでは物足りなくなる。そして高這いから立ち上がることもできるようになる。それまでは、物につかまって立ち上がっていた。フラフラするが、立ち上がった。高這いから立ち上がると、物の手助けを必要としない。そのままたっちができる。
よく見ていると、足の、親指と小指の使い方が、大人とは異なっている。
親指は、しきりに上に上がる。何度も何度も親指を持ち上げる。小指は、外側に大きく広げるように、下に押しつける。明らかに、小指は、身体が倒れないようにバランスを保つように、踏ん張っている。私にはできない。できないというより、小指を使って踏ん張らなくても、私は倒れない。時々、体操競技をテレビで見ていると、床運動や平均台で、小指が使われているのを見かけることがある。小指が使われていると、身体でバランスをとるよりも、見た目でも身体が動かず、採点競技には適切であるように思える。
親指が上に持ち上がるのはなんだろう。
親指は、踏ん張っているようには見えない。ただ持ち上がっているだけである。
みんなの親指と小指は、異常と思えるほど大きい。ミッキーマウスは、デカイ足をしている。もしミッキーマウスの足が、大人のバランスであったなら、ミッキーマウスにはならなかっただろう。足が大きいからかわいい。足が大きいからあかちゃんっぽい。
実際に測ってみた。大人の、身長や足の長さや指の高さや甲周りなどを、１に揃えると、親指と小指の高さは０・８もあった。身長は月齢で異なるが、０・５で、足の長さは身長に比例していた。子どもは、足の指が異常に大きいのだ。足の指だけではない。手の指先も大きい。頭も大きい。骨盤も大きい。
この足の指が大きいことが、たっちの秘訣のように思える。バランスをとれるのだ。ウオルトディズニーの観察力と表現力は、すごい。

足の底のカタチも、大人とは違う。これも測ってみた。みんなの足は、一様に、指の部分が広がっている。踵の部分は大人と変わるところはない。大人の足の底は、指に向かって細くなっている。
しかも、みんなの指は、１本１本が自在に動く。足は手でもあったのだから、あたりまえだ。大人がおかしいのだ。指の部分が大きくて、しかも指１本１本が自在に動くと、たっちしても、倒れにくい。よくできている。

○歩きはじめるために

　まゆがたっちできるのは、保育園のみんなが、たっちしているからである。誰も立ち上がらず、ハイハイしていれば、まゆはずっとたっちできないだろう。つまりたっちするのは、学習による。
たっちしても、すぐに歩けるわけではない。
たっちするのは、上のものを狙ったからで、移動したいからではない。向こうの何かを狙った場合は、慣れたハイハイの方が速い。歩くニーズがないのだ。
それにもかかわらず、まゆもだが、歩きはじめる。実際に調べてみた。どのようにして歩くことが上手になっていくのか。
物につかまってたっちして、そのまま横にカニのように移動することが、歩くことの最初である。歩いてはいない。カニのように歩く過程を、通過しない子どもはいない。
前に歩くようになると、不思議なことが出てくる。どうして、右と左を間違えないのであろうか。馬だって、生まれてすぐに歩きはじめる。左右だけではない、４本の足が、ゴチャゴチャにならないで歩くのである。不思議である。学習なのか。生まれ持ったものなのか。
歩行には、左右のリズムがある。右右左といったリズムで歩けるのは、かなり後になってからである。最初は、右左交互に規則正しく歩く。考えているわけではない。自動的に右左が交互に出ていくのだ。この左右の歩行のリズムは、脊髄に記憶されているらしい。哺乳動物では、考えたらできないようなことは、みんな脊髄に記憶させているようだ。テニスの高速ボレーなどは、考えるヒマはない。イチロー選手が、細かいことを考えてスイングして

いたら、ボールはキャッチャーミットに届いてしまう。考えていたらできないようなことは、脊髄に記憶させると考えると、わかりやすくなる。
だから、まゆは、左右のリズムを間違えることなく歩きはじめる。
怖そうに、ヨチヨチと前に進む。左右の足を交互に踏むことができる。体重を支えきれなくて、保育園のフロアーを横切れない。とても歩いているようには見えない。倒れないように、身体を前に傾けているだけである。崩れるように倒れる。

○２本の足で歩くための工夫

　そもそも、どうして２本の足で歩かなければならないのだろう。豹や馬の方が、歩いたり走ったりするには便利である。４本あれば、しかも、リズムを脊髄が覚えていてくれて、間違わないという前提であれば、ゼッタイに有利である。人間も、４足使えていた頃は便利であったはずである。
しかし、ヒトは、４足より２足を選択した。
手と足を分離したかったのだろう。たとえ速く走ることを放棄しても、手が使えた方が、豹や狼に勝つ道はあったのだろう。確かにそのとおりになった。手を自由に使えるということは、道具を使える道を拓いた。
２本の足で歩くことは、板が歩くことに似てくる。前に行けば、反作用で後に倒れる。しかも、風圧を受けて後に倒れる。ヒトの筋肉は、すべて身体の後についている。多くの背中の筋肉も、お尻も、ふくらはぎも、みんな身体の後にある。ついたてになっているのだ。ヒトは後には、速くは進めないようになっている。
もう１つの工夫は、足の底の工夫である。
４本の足を、交互に組み合わせて進めば便利だが、２本では、竹馬のようになる。とても不安定である。特に、前進する時に、不安定になる。確かに２本の足は、脊髄が記憶している左右交互のリズムに沿っている。しかし、ポツリポツリになってしまう。
足の裏を、踵から地面に着けて、次第に指先に転がすように移動させれば、身体は前に移動する。
この工夫は素晴らしい。ローリングという。

このローリングという技も、脊髄が覚えてしまっているようだ。私は何も考えなくても、踵から着地して、指先に向かって転がすように身体を移動させる。
歩くことが上手になるということは、このローリングが上手になることと、ほぼ同じである。足の底を転がすことができれば、上手に歩ける。ゲタを履いて、東海道を旅する人はいない。ゲタがローリングのジャマをするのだ。
歩行の上手な人ほど、足の底が転がる。歩くことが下手な人は、足の底が転がらない。
まゆが歩きはじめた時、足の底は転がってはいなかった。あたかも、スキーシューズを履いているかのような、木クツを履いているかのような、ぎこちない状態だった。足の底が２拍子なのだ。私の足は、５拍子で転がる。
高齢になると、またあかちゃんのように返っていく。５拍子が４拍子になり３拍子になっていく。

○歩きはじめる

　ヨチヨチ歩きでは、ローリングをうまくは引き出せていない。竹馬と同じである。ヨタヨタしながら、前に進むが、倒れないように、次の足を出しているだけである。
あかちゃんの足は、しばらくは、軟骨である。４才ごろになって、土踏まずができはじめるまで、骨は、完全には硬くならない。歩かせれば歩くのではないか、練習させれば歩けるのではないかと思っても、ムリはムリである。
まゆは、自分で立ち上がって自分で歩きはじめた。
足の骨の軟骨の程度を、自分でたっちしてみて確かめている。歩いてみて確かめる。大人にはわからない。
保育園では、手を曳いて歩かせることもなかった。早くたっちして欲しいと、練習することもなかった。歩くことは練習ではない。みんなが、自分で学習することである。
ヒトは、どうして馬のように、生まれてすぐに歩けないのだろうか。
わざわざ、歩くチカラを遅く発揮させるように、プログラムしているとしか考えられない。

生き残ることから考えると、馬のように、生まれたらすぐに立ち上がって歩く方が、有利である。狼から、少しは逃れることができる。２本足になったことで、複雑化して、発育が難しくなったのだろうか。
多分、頭脳との連係の問題なのだろう。
頭脳は、脊髄の先端が肥大したものだが、たとえば小脳は、歩くことでは、体全体と、歩くことの調整を行っている。ＢＳＥの牛の歩きぶりをテレビで見ていると、脊髄にある左右の歩行のリズムが壊れているし、小脳での、身体全体との調整が、うまくできていないように見える。大脳は、右から来る自動車と衝突しないように、調整をしている。この小脳と大脳の調整は、無からはじまって、経験的に学習して積み上がるものである。
食べることだけでも、多くの調整を必要とする。おっぱいを飲むことは、自動であったとしても、お母さんが差し出すスプーンに慣れるのさえ、タイヘンなのである。２足になったからこそ、やるべきことが多くなったのだろう。しかも、頭脳との連係が密接である。
骨が次第に硬くなってくると、もともと備わっている、身体の後の筋肉や、左右の歩行のリズムや、足の底のローリングが、活きてくる。４足で走れるイヌにはかなわないが、イヌと競争することもできるようになる。アーチができてくる。２足歩行であるからの工夫は素晴らしい。ローリングであり、背面の筋肉であり、そして、アーチの形成である。土踏まずの部分にできる、骨のアーチの事である。バネになる。バネは、バネができてきた時に鍛えると、バネになる。年とって体重が増えてくると、夜になると、アーチはペチャンコになる。そして寝ることによって、アーチは蘇る。アーチがペチャンコになると、スキーシューズを履いて歩く感じになって、歩けない。

○手が自在になる

　４足の方が、歩くことも走ることも速いし、第一、安定している。なのに２足にした。２足では、猪に追いつかれる。手が機能しなければ、２足にした意味がない。
そのとおり、あかちゃんは、歩くことより手が使えることを先に覚える。
手は、いろいろなことができる。ジャンケンだってできる。手話だってでき

る。手はことばの代わりをする。けれども、手がことばの代わりができるのは、あかちゃんの時には必要がない。もっと大きくなって、使いはじめる。手は逆立ちの支えになったりする。これだってずっと後だ。手は、いろんなことができるけれども、それとて順番がある。
最近というより、これからは、手を使うスポーツでも何でも、すごく早い時期に、際立った人が出て来るような気配がある。ポイントは手だ。テニスでもゴルフでも卓球でも釣りもだろう、野球もだろう。中学生でプロの選手が現れるだろう。自動車や自転車や競馬のようなレーシングでも、可能性がある。中学生では、身体のチカラが、大人に近くなるからである。野球をやるのには、ある程度の身体のチカラがなければ難しい。
なぜ手なのだろうか。
唇は、食べ物の物性のセンサーだった。手は、手でモノを掴んだり、操作する物性のセンサーである。唇がセンサーの役をしなければ、食べ物を素早く、口で処理することができない。手がセンサーの役をしなければ、素早く、手でモノを操作できない。
私は、ポケットの中のコインを、指先で判断することができる。私だけができるわけではない。大人は誰でもが、ポケットの中のコインを、判別することができる。私は、１００円のコインが、表か裏かを判断ことができない。しかし、簡単に判断することができる人もいる。唇がセンサーである理由は、唇のセンサーのユニットの数が多いからであり、しかも、唇の各センサーが、発火しているからだ。多くの、手のセンサーユニットが発火するためには、すべてのユニットが使われなければならないだろう。
私は、箸がうまく使えない。箸は、遠箸と近箸があって、身体に近い箸を近箸という。近箸は固定されていて、遠箸が、親指と人さし指と中指で操作されて、上手に箸が使えることになる。人さし指は、手前に引く方向に動き、中指は、遠箸を押し開くように働く。私は、人さし指と中指が同じように動いてしまう。もう修正ができないのだ。頭で考えている時は、上手にできるのだが、おいしく操作できない。考えなければ、人さし指と中指は同じ動きをする。
私の箸使いの、指のセンサーユニットに、発火していないユニットがあるのではないかと思っている。ひょっとして、いくつかのユニットの組み合わせ

なのかもしれない。
ゴルフのように、微妙な手使いをするケースでは、箸使いと同じことが起こるだろう。いくら練習しても、ある段階より上手にはなれない。箸使いが上手になれないことと同じだろう。イチロー選手のバットコントロールにも、同じことを考えさせられるものがある。
時代が変わった。勉強して良い学校に行って、有名な会社に就職して、そんな選択だけではなく、小さい頃から、バットやラケットやクラブや工具を握る人が増えている。握らせられているのかもしれないが、私の箸使いを思うと、一理あるのだろう。これから、中学生のプロの選手や、プロの職人が現れるだろう。

○手はモノとの係わりのためにある

まゆの箸使いがどうであったか、私は確認することができなかった。まゆが、まだ箸を使える前に、私は園長を辞した。
保育園には庭があった。果樹がたくさん植えてあった。芝生があった。建物はすべて木でつくってあった。触って危ないものは何もない。まゆの手のセンサーユニットが、完全に発火されていることを、疑わない。
まず、手のセンサーユニットの発火である。
まゆは、何でも口に入れて、それが何であるか確かめた時期があった。何でも手で触ってみて、それが何であるか確かめている時期があった。大人はそのようなことはしない。目がすべての役を果たしている。見ただけで、それが何であるかわかる。時には、温度さえも理解できる場合もある。目は、１才くらいでは、まだ手のセンサーにかなわない。遠近や動きの予測などが、まだできないでいる。まだ、あてにはできないのだ。
１才２ヶ月くらいで、口でモノを判断することは、手でモノを判断する機能に追い越される。なんでも口に入れなくても、手で判断できるのだ。そこから急速に、手でいろいろのことができるようになっていく。スプーンを、上手くはないが、使うこともできる。ボールを投げることもできる。右手と左手が独立して、それぞれの役割をするようにもなる。
まゆを見ていて不思議なことに気がついた。モノを向こうに押すことができ

るのに、手前に引くことができない。モノを引っ張ることは、大人には雑作もないことだが、まゆにはできない。まずは、モノを、自分の身体から遠くに離すことから、できはじめる。まゆは意識はしてはいない。自分の身体に近づけているのは、ボールなどの丸いものだ。棒などは、押すことはあっても、引くことはない。曲げることもできはじめる。そして、引っ張ることもできはじめる。

モノが危険であることも、わかっているように感じた。

手は、モノとの係わりのためにある。手がモノとうまく係われなかったら、ムリをして２足歩行になった意味がない。

２０２０年頃の子ども達は、箸を使っているだろうか。箸は食べるための道具だから、どうでもいいではないか、という意見もある。りんごの皮を、ナイフで剥ける子ども達は、皆無だろう。箸使いも、ナイフ使いも、プロの技になっているかもしれない。トランプ使いのように。包丁というものが、家庭に存在しているだろうか。カットした食材しか、スーパーマーケットで売られていないのではないか。

まゆの手使いを確認できなかった。しかし、まゆが、もう包丁を持って、お母さんの手伝いをしていることを、疑ったりしない。魚をさばけているだろうか。プロにできることが、技の程度こそ違っても、一般人にできないことはない。

○遊び

　まゆがやっていることは、食べているか寝ているか遊んでいるかの、３つしかない。

手が自在に動きはじめると、遊んで寝て食べての順番になる。遊ぶ時間が大幅に増えてくる。

遊びとは何だろうか。

あかちゃんとは、生き残るコンセプトを、身体の内側に持っている人のことだ。身体の内側に持っているものは、生き残ることだけではない。遊びも、身体の内側に持っていると考える方が納得できる。それは、生き残るためではない。豹が遊ぶのは、生き残るための狩の練習であるかのように感じる。

しかし、まゆの遊びは、ちょっと違う。
積み木を積み上げるのが、生き残るためにものとは思えない。夏に、ホースから出る水の、予測のつかない動きと、ずっと戯れている。肩車をしてくれとせがむ。
昔の学者が、人間は、より高いものを得ようとして、遊びを内在させたと言った。遊びは、人間にとって不可欠だと言うのだ。一方で、遊びは、人間の過剰な部分である、と言った人もいる。不可欠なのか過剰なのか。
まゆを見ていると、遊びが過剰のものとは思えない。まゆから遊びを取り除いたら、何も残らない。
遊びを、競争と偶然に遭遇すると模倣とめまいの４つに分類した人がいた。まゆには、競争を感じることはなかった。しかし、大人は、競争がなければ、生きていけないかのようである。ビジネスでも競馬でもサッカーでも野球でもオリンピックでも、何でも、競争が原点になっている。遊びの中心は、競争であろう。競い合わないサッカーには、何の興味もないだろう。
まゆが最も興味を示し、好奇心を満足させるのは、予測ができないことが起こることだった。お昼に、お母さんが急に現れると、ビックリして満足する。昨日使ったボールと違うボールを見つけると、早速横取りする。
大人も同じである。パチンコが好きな人が多い。あのわけのわからない偶然性は、まゆがホースと戯れるのと、似ている。ずっとやっている。サッカーも、競争だが、偶然の出来事が多い。予測できないことが多い。
まゆが、模倣できるまで一緒にいたわけではない。
大人は、小説にしろ映画にしろゲームにしろマンガにしろ、とにかく模倣が好きだ。現在は、コンピューター技術が発展して、シュミュレーションの範囲が大幅に拡大した。宇宙にまで広がった。
まゆと近くの公園に出かけたことがある。すべり台は怖いが、１度滑ると、もう止まらない。
ディズニーランドや遊園地は、めまいの遊びに事欠かない。何度でも出かけたくなる。
遊びを、競争と偶然の出来事と模倣とめまいに分類した人の考えは、ピッタリではないかと感じる。しかも、これはメカニズムは理解できないれども、人間に共通に備わっていると考える方が納得がいく。誰に教わることでもな

いからである。遊びの方法だけを学習している。
豹にはない、人間だけに備わっているために、遊びは、始末がワルイ場合がある。過剰になるのだ。過剰になって、人間として、あり得る枠を超えて崩壊するケースを生む。
まゆには、まだそんな遊びの危険性など、関係はない。持って生まれたものならば、最大限に発揮できることが望ましい。

○遊ぶおもしろさ

１才８ヶ月の頃のまゆに、劇的だと、私が思うようなことが起こった。
それまでのまゆは、私が並べた積み木を、さっと近づいては、バラバラにするだけであった。そして急いで逃げて行く。まゆばかりではない。みんな同じである。
私と一緒に、積み木を積み上げて遊ぶのは、もっと大きい子ども達だった。模倣である。
そもそも、最初は、水がスキだ。そして砂がスキだ。そしてビーズがスキだ。最初は、よくわからなかった。法則がわからなかった。子ども達は、エントロピーの大きい方向に興味を持つ。だから、水、砂、ビーズ、と小さければ小さいほど、無秩序に、エントロピーが大きくなる順序に、スキになる。
そして１才８ヶ月の頃、いきなり、一緒に砂場で山をつくりはじめる。山をイヌにしろと指示する。積み木の山が電車になるようにしろと指示する。まだ自分では、積み木の山を自動車にすることができない。
時々、連れられてビーズ売場に行くことがある。ものすごい数のビーズが売られている。種類もすごい。いかにもまゆがスキそうだが、ここは大人のビーズ売場である。大人は、このビーズで何かをつくる。まゆのようにビーズを、手でバラバラにして遊ぶわけではない。何かをカタチづくるのだ。財布やバッグやその飾りをつくったりする。まゆの１才８ヶ月くらいに、突然変化したことが続いている。絵画というのは典型だろう。絵具というエントロピーの大きいものから、枠の中に１つのものをカタチづくる。
ただ、基本的に、エントロピーの大きいものを好むのは、人間共通なのかも

しれない。生き物共通なのかもしれないが、そのバラバラなものから、カタチづくることができるのは、人間だけだろう。しかも１才８ヶ月を過ぎた人間である。
まゆが、私と一緒になって積み木を積み上げて、何かしらのカタチをつくっている図は、頭に焼きついている。自分の想うことと異なることを私がすると、積んだ積み木を外せと言った。次第に私が、ジャマになっていく。もう自分で育ったのだ。

〇やはり自分で育つ

　まゆが、今どういう生活をしているのか知らない。
少なくとも、自分で育っていた。あれこれ小さなことまで指示されなければ、何もできない子どもではなかった。多分、学校ではトラブルが多かったであろう。今でも多いのではないかと、少しの心配はある。
子どもは、自分で育つことを意識をしないが、周りが、自分で育つように配慮することはできる。そのようにしてきた。
もし、子どもは大人の未発達な者だという、固定観念に囚われるならば、そのような大人に出会うならば、まゆは、身勝手に映るかもしれない。そのことが心配なのだ。かわいくないと映る。
心配をしてもどうにもならない。祈るしかない。
でも、やはりみんな自分で育つ。育てるから育つわけではない。そう思う。

学習ということ

〇まゆは私を観察している

　まゆが５ヶ月の頃、不思議なことに気がついた。
まゆは、いつも私をじっと見ている。私の目だけではなくすべてを見ている。不安げに見るのではなく、安心しきった表情で、にこやかに見ている。
最初は、これがどういうことなのかよくわからなかった。
少しづつ読めるようになってきた。まゆは、私の真似をしようとして、私を観察しているのだ。まだよく動けないのに、私のように動こうとする。
もうすぐ離乳食だろうが、じっと、上の子どもが、イスに座って食べるのを見ている。スタッフは、まゆちゃんも早く食べたいんだよね〜とあやしていた。
すべてが同じように進んでいった。まゆはいつも、私だけではなく、スタッフや上の子どもたちを観察している。
ハイハイも上手になった。柵越しに、上の子どもたちが、ハイハイで走り回るのを見ていた。いつの間にか、柵にまでハイハイできるようになった。もう、何度も何度も柵までやってくる。毎日毎日速くなる。とうとう、柵から出してもらった。柵から出ると、少しとまどう仕草をする。どこまで行っていいのか、ハイハイしながら振り返る。大丈夫だよ〜の声に、安心したように、また先を進む。振り返っては、また先に進む。そして素早く帰ってくる。そして、また上の子どもたちの様子を観察する。しばらくは、その繰り返しである。私が歩いていると、じっと見ている。なぜハイハイしないんだろうと思っているのだろう。だけど、ハイハイより便利そうだ。高い所にも手が届く。前に進むのも速い。私がスタッフに呼ばれて見えなくなると、追いかけてくる。どこまでも追いかけてくる。そして、大きな段差に阻まれて、どうしたものかと躊躇する。しかし、先に進まなければ、安心できる私のそばには来れない。何度も何度も、段差を降りることを試みるが、転がって泣き出す。
しばらくすると、ハイハイが上手になった。まゆのハイハイは素早かった。

膝を使わないで、足と手だけでハイハイできるようにもなった。足と手だけでハイハイしても、速く進むわけではない。高這いができるようになると、自分で１人で立ち上がることが、近くなる。自分で立ち上がる前に、壁のロッカーに手をついて、壁伝いに歩きはじめた。上の子どもたちが、みんな同じようにしている。自分のロッカーがわかっている。お母さんが来て、自分のロッカーから、洗濯物を出すことがわかっている。足に、何かがぶつかってバランスを崩して転んでは泣く。振り向いても、誰もいなければ仕方なく、また１人で壁に手をついて立ち上がる。壁に手をつくのは、もう１人で歩ける前兆であって、家庭では、こたつや食事のイスなどに手をついて立ち上がって、歩く。
すべて、観察して真似してできるようになる。

〇学習のお手本
　私は、まゆのお手本になっていたに違いない。私より、お手本として適当だったのは、お母さんやお父さんだろう。そして、もっと適切だったのは、自分のお姉さんやお兄さんだろう。保育園の上の子どもたちも、最高のお手本になる。
高這いも、お母さんはやってくれないが、保育園の上の子は見せてくれる。見せてくれなければ、学習することができない。まゆが、何か、新しいことができはじめる時には、だいたい察しがつく。特定の子どもを、いつも追いかけはじめる。高這いがカッコいいと思っているのがわかる。
大人になっても同じことだが、お手本がなければ、学習はできない。
私は、小さい時から作曲家になるんだと言っていた。ずっと思っていた。お手本がいたからだ。ハーモニカの、すごく上手な人がいた。いつも聴き惚れていた。それが、なぜ作曲家なのか今ではわからない。音楽は、おかげでずっと手放せない。作曲家になれなかったのは、身近に、作曲家のお手本がいなかったためだと思う。私にセンスがなかったとは思いたくはない。すべからく、このようになっている。
狼と一緒に暮せば、狼のように走ってしまい、４足で速く走れない自分を、悔やむだろう。立ち上がるとは思えない。

子どもは自分で育つ。
大人にできることは、育てることではなく、あかちゃんが、自分で育つ、お手本になることだ。
まゆがスプーンを持って、自分でごはんを食べはじめた時、イライラして、器を放り投げたことがある。まゆだけではない。上手に、自分でスプーンで食べている、上の子がいるのだから、当然お手本にするのだが、うまくいくものでもない。誰でも学習の効果が出なければ、イライラする。いいではないか。
保育園に階段が設置してあった。屋内にも庭にもあった。まゆは、登れもしないのに、登りはじめる。４段くらい登って振り返って、大きな声を出す。もう先へは進めない。怖いから諦めるのかと思っていたら、また登りはじめる。お手本がいたのだ。登れるようになる。
もし保育園に、まゆ１人だったらどういうことになるのだろう。考えたこともない。多分、階段は登らないだろう。お手本がないのだ。縁側から、庭の芝生に降りる時に、足がつかなくて転ぶ。遠回りして行けばいいものを、縁側から降りては転ぶ。まゆ１人だったら、縁側から庭には降りないだろう。
まゆには、どうしてもお手本が必要なのだ。まゆ１人だったら、私が、階段を登って見せなければならない。まゆは、お手本がないことには、何もできない。学習できない。
問題は、なぜ学習するのだろうということだ。

〇学習のモノ

まゆが、何か新しいことができはじめるのに、モノが欠かせない。
ハイハイのお手本があっても、ハイハイできる場所がなくては、ハイハイはできない。伝え歩きをするのにも、伝わるモノがなければ、伝い歩きができない。先回りして、適当なモノを配置できるようになったのは、まゆが、もう大きくなってからであった。まゆに、教えてもらった。
クレヨンを、目に届くように置いておく。カリキュラムにあるからとスタッフに怒られる。まあ〜いずれ教わるからいいか〜と弱気になったりする。
バッカだな〜まゆの目はこう言う。いつもスタッフに怒られてばかりいる。

食べることも歩くこともりんごの皮を剥くことも、すべて学習によって身につく。もちろん、自転車に乗ることも自動車を運転することも、スキーをすることも泳ぐこともである。

まゆがやっと歩けるようになって、庭に出してもらった時に、上の子が、庭の山に登るのを、じっと見ていたことがある。失敗して、転げ落ちるのを見ていた。上までたどり着いて、うれしそうにしているのを、じっと見ていた。山から降りることができなくて、泣き出す上の子を、じっと見ていた。

この山がなければ、登ることを学習はできない。

学習のモノの大切さは、大人になっても変わらない。

カメラが手放させない友人がいる。ファインダー越しに、何でも見てしまうから、何の学習になったのかわからない。それでも、カメラさえあれば幸せなのだ。あれは何の学習だろうか。学習ではなくて遊びなんだろう。目的がない。

私自身は、幸福の概念を、情熱を持って追いかけるものが多いほど、幸せなんだと思っている。だから、趣味が多い。単なる趣味と、情熱を持って追いかけることの違いは、研究することだし、学習することだし、生活になることだ。

その友人のカメラは、研究するし学習する。ハードとしてのカメラだけではなくて、場面を学習する。幸せなのだ。

パソコンだってケータイだって、みんな同じである。

大人には発育がない。発育のために学習することはない。しかし、まゆたちは、発育のために学習することがほとんどである。まゆが、自分は、手がまだうまく使えないと思っているだろうことは、私が、ドライバーで電気の傘を修理しているのを、じっと見ていることでもわかる。自分もやりたいのだ。モノがあれば、いじってみる。手はモノがあるから手になった。手がうまく使えるように学習する。

学習にモノは欠かせないのだ。

○学習のコンセプト

学習で最も大切なことはコンセプトであろう。

ピアノ教室に通いはじめる。算数の塾に行く。英語だって最近は多い。野球教室サッカー教室。しかし、少なからず、学習のコンセプトを持たないままである場合が多い。コンセプトがないままでは、継続することは難しい。

あかちゃんは、どうして、誰にも教わらないのに、どんどん学びとっていくのだろうか。

あかちゃんは、学習のコンセプトが備わっている。生き残ることを、身に着けて生まれてくるのがあかちゃんだが、これが学習のコンセプトだろう。少し大きくなると、これも身体の内側にある、遊びがコンセプトとなる。

学習にとって、最も大事なことは、コンセプトだ。

あかちゃんには、学習のコンセプトなど考えることができない。そんなことよりも、早くどんどん大きくならないと、危ない。危なかった。狼に襲われる。発育しないといけないのだ。学習のコンセプトが備わっている、と考えるのが妥当だろう。

実際に、そうだ。

あかちゃんは、生き残れる順番に学習をする。まだスプーンからスープを飲めない時に、歩くことを学習することはない。自分で、手で食べ物を口に運べるようになってから、歩くことを学習する。この間に、学習のコンセプトがどうこうといった、メンドーなことはない。シンプルなのだ。

大人はややこしい。

なんで受験勉強しなければならないのか、納得できないまま、お手本とモノだけで、徹夜で勉強する。しかし、身体の内になる遊びに、勝てるはずがない。受験勉強を、遊びとは考えられない。大人は不思議なのだ。まゆだったら、受験勉強を遊びと考えるだろう。おもしろくなかったら、やらない。

大人は、大人的コンセプトを持ちたがる。がいである。勉強のしがいがないなどと言う。

高齢になると、更に、がいを欲しがる。生きがいである。働きがいなどもある。

まゆのようには、いかないのであろうか。生き残るだけでは足りないのだろうか。内なる遊びに任せるだけでは、ダメなのだろうか。少しよろいを捨てれば、まゆのようになれるのではないだろうか。よろいを少し捨てれば、これも身体の内にある、愛が蘇る。

学習がなければ、野球だってゴルフだって、上手くなれない。最近では、お手本とモノに欠くことはなくなってきている。少なくとも大人になれば、お手本とモノは手に入る。
一般的に、大人の学習のコンセプトは、まゆに較べれば、不純であることが多い。つまり、自分のよろいのための学習である。この免許を得れば、ハクがつくなどと考える。
大型の運転免許をとらなくては、明日からの生活に困るというコンセプトもあるから、一概に不純だとは言えないだろうが。概して、不純である。だから、なかなか学習の効果が上がらない。
問題はコンセプトである。

○大人はすぐに目的を探す

　大人は、すぐに目的を探す。
何かをしたい時には、目的を明確にしなければならないと教わるし、キツく言われる。あかちゃんの目的は、生き残ることであるが、そのことが大人にはわからない。
ティッシュペーパーを、ガンガン終わるまで抜き出すし、トイレットペーパーを、終わるまで巻き出す。これに目的はない。ただそうしたいだけである。遊びなのだ。
大人は、ティッシュペーパーを、むやみに引き出したりしない。常識なのだ。それでも引き出すからには、何らかの目的があると考える。
目的とは何だろうか。
人が動けば、そこには愛が不可欠である。愛は、終わってみなければわからない。愛に目的などない。それでは、大人が言っている、目的を持って行動するようにとは、何なのか。それは愛ではないらしい。
目的とは、何のためにであるらしい。何のために、ティッシュペーパーをむやみに引き出すのか。
大人は、なぜ、何のためになどと考えなければいけないのか。考えて行動しないさいと教わるのか。
明らかに、ある特殊な論理が働いている。何のためにが明らかでないこと

に、動いてはならない。その何のためにが、社会を乱すことであってはならないのだ。つまり、社会のよろいを乱してはならない。
何が社会を乱すのか。
社会とは、そこに集まっている人の、心が集まったものだから、それに反逆してはならないのだ。会社の社会や国の社会など、数限りない社会がある。それぞれに、掟のようなものがある。
時として、目的が、人間としてのあり方よりも、ずっとずっと小さなものもある、にもかかわらず、自らを束縛してしまうことがある。自らのよろいが、それを受け入れる。社会にもよろいがあるし、個人にもよろいがあって、社会のよろいが、個人のよろいを呑み込むことが多い。
愛はなくなってしまったのか。
よろいに対抗できるのは、愛だけである。愛が消えると、社会や個人は、よろいだけの世界になって、何度も繰り返してきた、どっちのよろいが立派なのかといった、わけのわからない争いになってしまう。
大人の社会で、人が動く押しボタンを感じることは、少なくなった。なんらかの、小さな目的のために、動いているケースが多い。目的さえあれば、少々のことは、人間として、奇異な目で見られないかのようにも感じられる。
そんなことはおかしい。
まゆは、確かに目的もなく、ティッシュペーパーを引き出す。大人が同じことをしたら、どうにもならない人だと、烙印を押されてしまう。まゆが正しくて大人が正しくないと言ってるわけではない。まゆが、お母さんの気持ち察するようになったら、ゴメンナサイになる。
問題は、目的というものが、無意味だということだ。目指すことだったらわかるのだが。目的を持ちなさい、考えなさいは、子ども達にわかりずらい。

○学習のコンセプトは学習から得られる

　学習で最も大切なことは、コンセプトである。何のためにではない。大人のように、がいを探さなければ行動できないと、ずっと何もしないことになる。もともと、がいなどは、勉強して得られるものでもない。心が動いて、

学習してみたら、結果的に、がいになる。心とは、愛の器である。
学習のコンセプトとは、そういうものだ。
まゆたちは、そんなメンドーなことは必要としない。身体に備わっているからだ。しかし、いつかは、その備わっているものも、よろいに隠されてくる。
生き残るコンセプトが消えてきて、遊びのコンセプトに移ることが理想だろう。どちらも身体に備わっている。まゆがどうなったか、知るまで一緒に暮すことはなかった。
フツウは、生き残るコンセプトが消える頃に、社会常識の学習というものが、否応なしに入ってくる。教育である。社会の常識の学習が入ってきて、生き残るコンセプトは隠されてくる。
社会の常識は、その集団のよろいであることがフツウである。つまり、社会の常識を身につけることが、教育ということになる。
学習のコンセプトは、ここらあたりから、つくられたコンセプトに変わってくる。身体の内なるコンセプトとは、異なるのだ。身体の内にある遊びのコンセプトと、つくられた学習のコンセプトがケンカして、ずっと暮すことになる。
高齢になって、がいを求めるが、がいは、指示されるものである、という教育効果が染み着いて離れない。つくられた学習のコンセプトである。与えられると思い込む。生きがいが見つからない、などということになる。
もともとヒトは、より高いものを求める、つまりクリエイティブさが備わっている。だから、地球のチャンピオンにもなった。一般的には、それは遊びのことである。
つくられたコンセプトでは、指示を待つことになる。
しかし、遊びのコンセプトから、新しい目指すものを発見した時には、身体の内から、やりたいと思えることになる。
まゆが、生き残るコンセプトを越えて、新たなコンセプトを得なければならない時期にまで、一緒に暮すことはなかった。もし一緒に暮すことができたならば、私は、まゆに、世の中にある楽しそうなことを、ド〜ンと広げたに違いない。子どもが、身体にくっついている、生き残ることや遊びという、目的とは無関係のコンセプトから、つくられた学習のコンセプトに、社会の

常識を学習するコンセプトに、移行させられる時、ド〜ンと、世の中の、知ればもっとおもしろくなる、モノや風景や出来事を見れば、ヒトが持っている、本来のクリエイティブさを、失わないで済むだろう。
世の中には、多くのお手本やモノがある。

○勉強とは何だろう

　勉強が、よく引き合いに出される。目的と目標を持って勉強するように言われる。算数がよくできないから、算数のチカラを引き上げるために、だったりする。勉強とは、本当は、このような事ではないのだろうが、固定観念化して、定められて教えられることを吸収するというか、頭に叩き込むことを言う。
勉強ができるとは、教えられたことが、頭に叩き込まれる度合いが高いことを指している。応用も含めて。自分で、何がやりたいのかを、探すチカラのことではない。
まゆには、勉強の概念がなかった。しつけと称して、いろいろ教え込まれることも、まゆには関係がない。いくら、しつこく言われたとしても、自分が興味のないことには、無関心である。何度同じことを言わせるの〜と怒られる。しかし、また忘れる。とても勉強のできる子どもではない。それはまゆだけではない。子どもは、みんな勉強ができない。
みんなが大きくなって困るからとか、なにやらわけのわからない理由を言われても、意味がわからない。とにかく、おもしろくないのだ。
学習と勉強の違いは何だろうか。
学習にはコンセプトとお手本とモノが欠かせない。どれかが欠けると学習にはならない。勉強は、コンセプトもはっきりしないし、お手本もない。多分、大人は、昔に勉強したことの、ほとんどを忘れているだろう。忘れてしまっても、たいして意味はない。なのに、たいして意味にないことを、勉強するのだろうか。鎌倉幕府が何年だったかどうかなど、知りたければネットを探ればよい。頭脳は、もともと、そいうふうには仕組まれてはいない。実家の電話番号すら忘れてしまう。忘れるのが頭脳の特徴である。しかし、考えを展開したり、グッドアイデアが出せる。時たまだが、我なりに、これは

すごいと思うようなことを、発見したりする。これが頭脳の本質だ。
グッドアイデアを、急場で出せなければ生き残れなかったのだ。電話番号をいくらたくさん覚えても、生き残ることには関係がない。
頭脳は忘れたがっているのだから、逆らって、忘れないように反復しても、しょうがないではないか。
頭脳は、私達に無意識とも思えるような、多くの事をしなければならない。身体の動きである。多くの筋肉を調整して、危機を脱しなければならない。頭脳の本来の役割は、筋肉の調整にある。とても、電話番号なんか覚えていられない。頭脳は、向こうから自転車が猛スピードで走ってきて、どう避けるか、指示しなければならないのだ。無限にある危険なケースを覚えるのだ。
確かに、優劣順番を決めないと困ることがある。大学に入るのにも、数が限られている。これをゲームと思うか、ヒトの本質と思うかが、分かれ目である。ゲームだったら、負けたとしても、次に勝てば良いし、おもしろくやることだろう。人間の本質と考えるのだったら、崖っぷちに立ってしまう。
勉強とは、そういうものだ。

○あかちゃんに教えることは何もない

　まゆに教えることは何もない。
私は、３年間保育園の園長だった。最初は、教えなければならないと思っていた。私の中に、勉強だとか教育という、固定観念があった。次第に、その考えは崩れていった。みんな、自分で学習する。箸の持ち方を教えたりするが、それもおかしいことに気がつく。箸は、教わって持てるものではなく、持てるような手の操作ができるようになると、自分で操作しようとする。お手本があるので、早く箸を使いたがる。ここで箸の持ち方を教えてもどうにもならない。箸使いが上手になるようにするだけの事になる。
教えるとはなんだろうか。
大人が、あかちゃんが、自分達より未発達だから、自分と同じようになってくれないと困るから、教えるのだろう。お店のモノを、お金を払わずに持って来てはいけない。社会にはルールがある。確かに、あかちゃんには社会の

ルールはわかりにくい。どうでもいいことですら、ルールのようなものがあったりする。子どもは、社会のルールがわからないから、教えるのだろう。１人前の人間になってもらわなくては困る。確かにそうだ。
しかし、教える必要があるのだろうか。子ども達は、大人が財布から、お金を取り出すのを見て学習する。社会のルールを学習する。
保育園の園長なのに、何も教えないことは、不思議なのかもしれない。教えるということを、よくよく考えてみると、私の生きるスタイルを、子ども達に伝えているようなものだ。押しつけているとも、言える。そうでなくても、私が、お手本になってしまっているのだから、教えなくても影響を受ける。
９ヶ月くらいの子ども達は、歯が生えてきて歯根膜が出てきて、センサーを鍛えようとして、スリッパをかじる。バッチーからと何度取り上げてもまたやる。おしまいには保育園にスリッパは皆無になる。スタッフは怒るのに、私は怒らない。他に、なんか衛生的な方法が考えつくまで、バッチーけど止めさせてはいけないと思っている。スタッフには勝てないのだが。拒否しない姿勢は、なんとはなしに影響するものだ。
教えなくても学習する。暮すスタイルすら学習する。
教えることを、ことばだと思っているフシがある。不思議なことだ。幼稚園や小学校の現場にいたわけではないので、よくはわからない。教えることが、耳から入っていくことだと思われていることは、大人になっても、教育研修などあって、ほとんど変わらないのだ、ということがわかる。
ことばとは、本来そういうものではない。身体の動きを補うものだ。危険が迫ったから助けを呼ぶ。感動したから感嘆する。歌を歌いたいから歌う。耳だって本来は、自然の状況を、正確に身体が掴むためのものだ。狼が来たことがわかり、竹の葉音で風の強さを察知する。
確かに、人間だけにしかないことばが、生き方を豊かにしている。だけど、教えるということに多くを使って欲しくないと、子ども達は思っているだろう。過ぎるのだ。ウルサイ。教える楽しさや優越感など、どうでもいい。
もし、あかちゃんが、あかちゃんという人だと思えば、教えることやしつけが、ふさわしいことではないことが理解できてくる。まゆは大きくなっている。教えるということは、おかしなことだと、気づいてくれているだろう

か。

○教えるという不思議さ

　まゆと一緒に暮していると、どうしても、自分のエリを正すことになってしまう。べつに、社会にワルイことはしていないのだが、お手本になっていることを、実感するからだ。どうしても、教えるという感覚にならない。何度も意見されていた。教えなければならないことがたくさんあると言われた。みんな忘れてしまった。すべてが、何か違うのではないかと思いはじめる。

絵本の時間に、今日選んだ絵本を読んでも、じっとしているだけだ。仕方なく、じゃ〜こっちの本にするか〜と言うと、一斉に近寄ってくる。お気に入りがあるのだ。おもしろくなければ何もしない。せっかく高いお金を払って遊具を買ったのに、見向きもしない。これで数を教わるのだそうだ。ゼンゼン違うだろう。ケーキ３つづつだからと言えば、我先に大きいケーキを３つ掴もうとする。私が先きに掴んだ３つと、同じことをする。私は当然大きいケーキを掴んでいるから、取り替えてくれと交渉してくる。フツウのことだ。

こういう中に、教える行為があるのだろうか。

トイレが、なかなか自分でできるようにならない。教えなければならないと言われる。教わったって、できないものはできない。保育園では、なかなか難しい。お手本を示せないからだ。お母さんが、いつもトイレに連れて行けば、だんだんできるようになる。保育園で教わるようなことではない。

私が、保育園の子どものトイレで、一緒にオシッコをして、スタッフにひどく怒られたことがある。私にはそうするしかない。常識を外れていると、うわさになる。だけど、みんなは、私がどうするのか興味があるのだ。

発達診断というものがあったりする。スタッフみんなで相談して、保育園のマニアルのようなものをつくる。お母さんにお知らせしないといけないのだ。ほっておくと、だんだんテストになってくる。クリヤーしているのかしていないのかの議論になる。どんどん無意味なことになる。これはなんだ。教えなければならないドグマのようなものに犯されている。

四角を描くことは難しい。今できないからなんだろう。順番を決めなければならないから、難しい問題を出すのと同じだ。

〇教育って何だ

　子ども達が少し大きくなると、教えることが定まってくる。これこれのことはできるようにしましょうになる。スタッフの優劣にも、保育園の優劣にも影響する。
おかしなことだ。
教育ということばは、どう考えてもおかしい。
教え育むとは何だろうか。立派な人が、未発達な人を、教え育むのだろうか。立派とはなんだろう。よろいが立派なのか。人間としては、どんな大人も、あかちゃんにはかなわない。人間に何が大切なんだろうか。
人は、生まれた時から自分で育つ。生き残りたいから自分で育つ。生き残ることを優先するように仕組まれているから、自分で育つ。８ヶ月で乳歯が生えてきて、６才くらいで永久歯に生え換わる。生き残れるように仕組まれている。
遊びのエクスタシーもあって、クリエイティブに向かうことも仕組まれている。
仕組まれているのだから、教わらなくても、そっちへ向かう。よろいさえなければ、向かうのだ。
教育といことばは、どうも、人間の本質から外れている。王様になるための、よろいの教育という意味がふさわしい。王様が人間から外れているのではない。それは、大人がそうしたいからにすぎない。子どもには関係がない。
教育は、子どもには関係がないのだ。
大人が、子どもが自分で育つためにしなければならないことは、子どものお手本になることと、自分で学習するモノを示すことだ。世界中を旅できれば、最高のモノになるだろう。何かに愛を感じれば、身体は動く。それは、大人の意図したことではないかもしれない。
時々、まゆが学校で苦労しているのではないかと、案ずる時がある。何でも

自分の思ったとおりのことができたからだ。教育とは、そういうものではない。おもしろいとか、おもしろくないとか、言っている場合ではなくなる。ガマンしなくてはならなことも承知しただろうか。人が動く押しボタンで動くことが、人間としてふさわしいけれども、世の中、よろいでみんな動いているんだと、わかっただろうか。わかんないだろうな〜。人が動く押しボタンで生きたら、けっこう生きにくいもんだと、わかっただろうか。わなんないよな〜。それでも人が動く押しボタンで動くと、異端になるなど、わかんないよな〜。

教育というのは、その時の社会にふさわしい人を教え育むことだから、社会がよろいの立派さを競っていれば、当然、子どもも同じような考えになる。その時の社会が、争を欲すれば、子どもも同じようになる。社会とは、みんなの心の集まったものだから。

本当は、愛が溢れていないといけないのだが、よろいの集まりになるのが常である。

○自分で育って自分で学習する

　人は自分で育って自分で学習する。そのようにできている。子どもに任せておけば、クリエイティブに暮らすという、人間にしか持ち合わせていない暮らし方をするだろう。ただ、学習には、良いお手本とモノが欠かせないから、どうしても、それにふさわしい大人が必要だ。もし、その条件が叶うならば、子ども達は、人が動く押しボタンに従った、人間らしい生き方をするのだろう。

現実は、このようになっていない。良いお手本とモノがないのだ。よろいのないお手本など少ない。大人のよろいを学習してしまう。教育だってなされる。よろいのお手本には事欠かない。

自分で育って自分で学習して自分の考えを持ったとしても、葛藤がはじまる。難しい。

どうしても、大人とあかちゃんや子どもの関係を、変えなければならない。あかちゃんは未発達な大人ではなく、発育するという特徴を持った人であると。大人が高齢者を尊重することが多いように、あかちゃんも尊重しないと

いけない。それがあたりまえである。あかちゃんは頼りになる。自分を変革するお手本である。
人間が、共通して持ち合わせている評価的思考を、改めないといけない。あかちゃんを評価したらゼロ点になる。そういうことではない。あかちゃんは、すべての大人のお手本になれるから、１００点なのだ。価値観がおかしい。
大人とあかちゃんとの関係が変われば、すべてがラクになる。
まず、育てるプレッシャーは余計である。自分で育つのだから。尊重するから、もっとあかちゃんがわかりたくなる。もっとあかちゃんのことがわかれば、自分で育つ手助けがわかる。お手本になる必然性がわかる。
そもそも、あかちゃん学とか子ども学などが、学問にないことからしても、あかちゃんが尊重されていないことが理解できる。
教育するプレッシャーも余計である。自分で学習するのだから、大人は、お手本になって、モノを揃えればよいことになる。お手本ができなければ、お手本を誰かに頼めばよい。一般的に先生と言われている人は、学習のお手本を頼まれたに過ぎないのだろう。ただそれだけなのに、先生ということばは、よろいにまみれてしまう。
何よりも、大人のよろいを押しつけないことが大事だが。……これも難しい。
難しいと言っていたのでは、いつまでも変わらない。
あかちゃんは、ずっと何万年も前から変わらない。変わったのは、大人である。この大人の変わった方向は、人間として望ましい方向ではない。よろいを厚くする方向は、望ましいことではない。よろいを捨てなければ、まずいことになる。

あかちゃんのように

〇あかちゃんのように

　私が、自分を変えなければならなかったのは、あまりにも、あかちゃんと大人の生きる姿が異なるからだった。どう考えても、私よりあかちゃんの方が、人間的には優れていた。
表裏がない、よろいがない、計算がない、愛だけで動ける、自ら育つ、自ら学習する。
私は、ほぼ、この逆の人間であった。表裏があり、厚いよろいを欲しがり、計算高く、愛だけでは動けなく、教えられなければ何もできない。
確かに、あかちゃんより、算数は私の方ができるし漢字もできるし、英語だってできるし、社会の常識がわかる。
人にとって、何がもっとも大切なのかという価値観の問題である。
自分で育って自分で学習するチカラがあれば、たとえどんなことに心が動いたとしても、お手本とモノがあれば、短い時間に、それを自分のものにすることができるだろう。心が動く、人が動く押しボタンが隠されていなければ、興味を持ち、情熱を傾けることに事欠かないだろう。
もし、よろいで動いていたならば、名誉や証書や報酬が伴わなければ、無に帰す。情熱は消えてしまう。たとえ、名誉や証書や報酬が伴ったとしても、ながくそれを保つことは難しい。
もしあかちゃんと一緒に生活するチャンスがあれば、あかちゃんしか持ち合わせていない、人間としてのチカラの源である、人が動く押しボタンで動いて、自分で育って、よろいを身に着けず、自分で学習してを、手助けしたいものだ。
それだけではない。自分が、いかによろいにまみれて暮らしているか、人間としての原点から離れてきているかを、知らせてくれる。
一般的に、大人は、よろいに覆われている。自分でも、それに気がつかない。あかちゃんと一緒にいれば、チャンスはあるのだが、それでも気がつか

ないかもしれない。したがって、よろいを脱ぐことなど、気がつかない。気がついたとしても、よろいは脱げない。アイデンティティを失うことになる。小さい頃から、そのように育てられたのだ。教育されている。よろいの価値観である。
私のように、自分の生き方を変える人もいるだろう。よろいを脱ぐ人もいるかもしれない。よろいを脱ぐとタイヘンなのだ。一般的には、何を考えているかよくわからなくなる。あかちゃんが、何をしたいのかわからないのと同じである。目的がわからない。あかちゃんに目的はない。人が動く押しボタンに従うから、戦うことも多くなる。拍手喝采を浴びるかどうか、考えて行動しない。人が動く押しボタンが動いてしまえば、たとえ１人でもやるのだ。したがって、シンドイ。
人が動く押しボタンは、愛のボタンだが、唯一、人間として、生きる軸になり得るものものだ。人間だけに備わっている。
もし人間に未来があったならば、それは、人が動く押しボタンが勝利したことになる。大人になるということは、本来の人間とは何かを、忘れさせることに等しい。人が動く押しボタンさえもわからない。

○まゆに話すチャンスがあれば

　もうまゆに話すチャンスなどないだろう。
まゆと話しをしたとは思っていない。一緒に暮らした。身体と心がつながっていた。しかし、今は話せるだろう。
よろいを少なくして、人が動く押しボタンにしたがって、生きてほしいと、理解できてもできなくても、話すだろう。このことは、話す必要などないと思うが。
人が動く押しボタンにしたがって生きることは、けっこう苦しいことが多いことも、話すだろう。
まゆに教わったことを、まゆに話すのはおかしなことだ。
できうれば、よろいの厚い人を、ワルく言わないでほしいと話すだろう。フツウに生きれば、みんなよろいが厚いのだから。
できうれば、よろいの厚い人の、お手本になってくれればいいのだが、そう

話すだろう。

まゆ

２００９年

２０１９年

げんじあきら

まゆ

著者　　　　げんじあきら